
あゝ皇国の零～東西冷戦、そして世界大戦...？

瑞鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あゝ皇国の零々東西冷戦、そして世界大戦…？

【Nコード】

N3617H

【作者名】

瑞鶴

【あらすじ】

もうぶっ飛んでますがゼロの使い魔との二次元作品です何故か拡大する共産主義勢力、それに接点があると噂のエルフ、そして以前行方不明の2名。日本軍が現れてからどんどん変わってゆくハルケギニアまた世界大戦へと突入するのか？

ブローグゝ主な登場人物（前書き）

主役変わりました、だって天皇陛下を
主役にしたらちよっと…

ちなみに日本に空軍が出来た理由は後ほど

プロローグ／主な登場人物

皇紀2611年、4月1日

平和な時が流れている

彼は21歳、空軍のパイロットだ

…といつてもエリートだ、16歳の時に家を出て空軍士官学校に入
学、今年卒業し

少尉として航空第1師団、つまり東京防空部隊に配備された

最初つから士官であり既に部下がいる

操縦技術の腕も確かだ、普通の新米パイロットよりも遥かに上手だ

…といつても隣のガリアとは友好国だしクルデンホルフ大公国は
実質日本の属国で

超友好国で兵器も日本製の物を使っているしゲルマニアは一時期の
活気を失ったし

貴族の神聖アルビオンも距離があるし戦争する気配がまるでない

領空侵犯がないか警備したり輸送機操縦したりたまにある航空シヨ
ーで

昨年学徒として操縦し今年も操縦する予定、それくらいしか彼には
任務がない

実に平和である

しかし、平和はつかの間の存在でしかない、戦いがまた始まるかも

しない…

主な登場人物 -

草加徹也 -

主役らしい

大日本帝國空軍少尉、士官学校を卒業したばかりだがエリートで既に部下もいる、だが決して嫌な奴ではない

レオナルド・ルッキーニ元帥 -

元ロマリア空軍元帥、しかし嫌々やっていたらしい
そして今、日本空軍の元帥となった50代の親父
元ネタはイタリア空軍のフランコ・ルッキーニ

長田 -

大日本帝國空軍少尉、徹也の同期生

東郷 -

大日本帝國內閣総理大臣、実は大和帝國の政治家
今日本に政治できるロクなやつがないから派遣された

石原元帥 -

お馴染み、陸軍元帥となった

木下元帥 -

お馴染み、海軍元帥となった

健介 -

前作の主人公、一応登場するけど天皇だから活躍しない可能性大

タバサ -

前作のヒロイン、一応登場するけど皇后だから活躍しない可能性大

シャンタル -

ガリア王国国王、相変わらず暴走気味だがいちおうしっかりやってる

キュルケ -

ゲルマニア国王、後々大変な目に合う

ゲオルギー・ロマノフ

ロマノフ帝國皇帝、ある奴らに国を倒され追われる

さてさてどうなる事やら

ブローグゝ主な登場人物（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

1 三年間の歴史（前書き）

まだ本編ではありません、飛ばしても結構でございます

1 三年間の歴史

皇紀2608年6月18日、ハルケギニア世界大戦が終結した
この戦いで両陣営に大勢の死者が出た

ハルケギニア始まって以来の世界大戦であった

6月31日、大日本帝國が連合国に空軍の設立を求められる
理由は陸軍航空隊は攻めに行く軍隊にあるものとされた
日本はあっさりと承諾した、その理由は陸軍のみで航空機の整備は
難しいので
さっさと空軍つくってくれと思っていたからである

7月5日、陸軍機の全部と海軍機の一部が空軍へと移管
大日本帝國空軍が発足した

7月10日、艦上戦闘機閃光二二型の生産が開始、局地戦闘機タイ
プで航続距離を犠牲
（といっても1900キロもあるが）にして速力と運動性能、さら
なる防弾性を追求した
こちらは海軍及び空軍に配備される予定だ

7月24日

八式中戦車の配備が開始された、最大装甲は傾斜75ミリ、主砲は
75ミリ戦車砲が
搭載され最高速度も50キロに達し九五式軽戦車を置き換える予定だ
九七式中戦車にも手が加えられ主砲が57ミリ対戦車砲と以前も5
7ミリだが威力が
全然違う本格的な戦車砲が装備され速度も48キロまで上昇した

しかし最大装甲は25ミリと以前同様である
このチハはチハ改と呼ばれた

8月1日

翔鶴型航空母艦2隻「えいかく榮鶴」と「おうかく櫻鶴」が正式採用され
主力空母が六隻になった

9月には機械化を施した戦艦大和がデビューした
46センチの主砲は変わらないが一部が機械化され大和よりも戦闘
能力が上がった

ビスマルク無き今船同士の戦いでは最強の艦と言えよう

9月25日、

大和製空母「零城」と「吉城」が近代化改修を受けデビューした

10月、全部隊から零式艦上戦闘機が引退、ガリアと大和へ売却した
数機が練習機となりまた数機が保存されることになった
同時に空軍も八式戦闘機 愛称隼人が先行試作型あわせて30機が
配備され

BF109Gも数機が配備され九七式戦闘機を置き換えた

12月8日大日本連邦制発表、

イギリス連邦のようなもので主に対象はクルデンホルフ国

2609年3月5日クルデンホルフ国憲法が公布された
貴族制度を廃止させ独裁を禁止した、必要最低限の国防力は認めた
陸軍5万、海軍2万、空軍は禁止、兵器は日本が安く売った

5月、トリステイン独立の動きが見られるようになる

ガリア王国もトリステイン国憲法の製作を指示した

実はトリステイン魔法学院の再建が終了しほかの国が維持する余力がないから独立させると

いう説が浮上している

7月、神聖アルビオン共和国、再軍備宣言を行い陸軍省空軍省大臣が大日本帝國へ

学びに来る、留学先を大日本帝國にしたのはハルケギニア一番の先進国だからであろう

8月13日ロマノフ帝國、モスカウにてクーデター事件発生、共産主義者による事件らしい

9月12月、ノモンハンで満州国とロマノフ帝國が国境を争い戦闘開始

両国はたびたび国境問題で戦争を行う

第一発はロマノフ帝國で戦いはロマノフ優勢に展開していったが1月になって戦局が変化、

満州国が大攻勢をしかけ12月1日、停戦

2609年11月11日中華帝國にて内戦勃発、国と共産党がぶつかり合った

中華帝國の助けを聞き大和帝國も参戦、中華帝國軍を援護すべく南京へ出兵、

以降長期に渡る戦いが展開される

2610年1月3日ロマノフでも内戦勃発、国と共産主義者の戦いが始まった

4月、大日本帝國がなぜハルケニアで共産主義が広まり始めたか調査を開始

しかし具体的な情報は得られなかった

5月27日共産主義対策本部がガリアのエンジンハイムに設置

7月、日に日に増す共産主義勢力との戦いが長引き大和帝國国内で反戦活動が盛んになり

大和帝國の戦争継続が難しくなる

8月9日依林・李広宙が大和帝國へ亡命

10日満州国がロマノフ帝國の要請でシベリアへ出兵、共産軍と戦闘を開始

9月1日大和帝國陸軍撤退開始

10月頃、中華帝国高官大和帝國へ亡命開始

12月10日、北平陥落、中華人民共和国誕生

大和帝國が台湾を提供、中華帝国、拠点を台湾へ移す

2611年1月、空軍、一一式戦闘機がデビュー、最高速度689

キロ、運動性能は隼に多少劣る程度

武装は軽戦闘機と重戦闘機の間レベル、被弾に強い

2月、海軍、帝國大艦隊計画の第一段階、大和型戦艦1隻、長門型戦艦一隻、伊勢型2隻

扶桑型2隻、金剛型4隻、重巡洋艦2隻軽巡洋艦3隻駆逐艦10隻潜水艦3隻などが8月までに

完成すると発表、さらに現存艦艇と太平洋海軍軍縮条約により余剰となった艦艇を合わせれば

ハルケギニアでも類を見ない近代大海軍となる

3月、ティーガー1を元に一一式重戦車を実戦配備

装甲は100ミリ、しかも戦後からこの世界に飛ばされた技術者によつてチヨバム装甲となり

主砲は88ミリ高射砲、最高速度は43キロ、

この世界で最強の戦車となったがコストがかかり複雑な為生産は20両のみに限定される予定である

海軍、十四試艦上戦闘機の試作機を発表

そして…4月…本編が始まる

1 三年間の歴史（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

2、ロマノフ皇帝亡命

4月1日、京都まで鉄道が開通した、東京駅にて開通式が行われた

ちなみに大日本帝國はロマリアに建国されその首都、ローマが東京、ガリアとの国境付近に存在する古都が京都である

ブオオオオオ...

空軍は駅上空でアクロバット飛行を行う事になった
鉄道開通記念式典の一環である

飛行は運動性能抜群の隼5機が使用された
パイロットは草加徹也少尉や長田少尉など士官学校卒のエリートら
5名である

特に操縦技術が高い草加が編隊長に選ばれた

「わー！...！」

駅構内では観客が曲芸飛行を見て盛り上がる

ブオオオ...

さらに海軍の零式戦と編隊の隼の模擬空戦も行われた

ブオオオオ...

「零式戦は速力と武装でこちらに勝る！」

「が加速力と運動性能ではこちらが勝る！」

「だが後ろをとられたら終わりだと思え！」

「はい！」

飛行が終了すると徹也達は空軍基地へ帰投する
その後駅では陸軍軍楽隊による演奏が行われた

鉄道唱歌を火炮などを使用し大規模な演奏が行われた

ドオン！

そして…始発列車が出発の時

自国の国歌を斉唱、あたりまえのように全員が起立、君が代が演奏
され…

ポオオオオ！！！！

シュ…シュ…シュシュ…シュシュシュ…

始めて蒸気機関車が客を乗せて走った

ポオオオオオ！！

流線型のその車両、始めて運転されたのは特急「燕」

牽引機関車はC65、D52を元に帝國鉄道省車両部が設計、規模
はC62と同程度

最高時速は100キロ

始発列車が去った後、駅構内は異様な光景が広がっていた

「あ…あれ？ これお客さんの靴じゃないですか？」

「ほんとだ、みんな脱いでいったんだ！」

「こりゃあ大変つすね…」

「どうするへ…」

なんとご丁寧に靴が並んでいた

1時間後に駅から普通列車が走る、燃料保存の為鉄道は蒸気機関と電気で走る

普通列車は国鉄63系電車、たまたまこの電車を設計していた人がロマリアにいたため

この画期的な車両が正式採用となった

1時間後…普通列車第一号が発車した

ガガガ…グオオオオオオオオオオオオオオ…

吊り掛け駆動方式電車特有のあの音が響く

利用客は多い、皆鉄道が珍しくそして移動も便利になったからである
ろう

ちなみに今回靴を脱いだ人はあまりいない

鉄道省は報道機関を通じ靴をおかないで履いたまま乗るよう知らせたからである

一方空軍基地 -

「いやぁ…今日の編隊飛行は成功だったな草加」

「ああ、よく飛べたよ」

「隊長からもお褒めの言葉も貰いましたし、今日はほんとよかったな」

「まったく最近東亜情勢が不安定でロマノフも共産主義国家になりそうな時だけど

日本は平和だな」

「それが一番だ」

「あんまり戦いたかあねえよ」

ゴオオオ…

「なんの音だろう？」

ガチャッ！

「おい！ どこの国かもわからないが飛行機が飛んでくるぞ」

「なんですって!?!」

航空隊隊長から知らされたのは謎の飛行機だ

タタタタッ

「着陸するぞ！」

ギャッ！

………

謎の飛行機は止まった、

「な…なんだこりゃ！」

今試作機が製作中の大型戦略爆撃機「富嶽」のようだ…いやむしろ
B - 29 にも見えたのだ

ガチャッ

中から7名人間が出てきた

「あ…貴方は！？」

「…ここは…大日本帝國…です…な？」

ロマノフ皇帝、ゲオルギー・ロマノフだ、傷だらけだ

「貴方はロマノフ皇帝ではありませんか！？」

「一体どうされたのですか？」

「私は…亡命してきた…」

「帝國は…ソビエト社会主義共和国連邦になった…奴らは私を追っている…」

頼む私をかくまってくれ…」

「お願い！ パパを助けてあげて！」

ロマノフの娘らしい、この父親とはまったく似ていない銀髪のセミロングの

女の子が父を助けてくれとたまたま目の前にいた徹也に迫ってきた

「えっ！？ ちょっとまって!？」

「私の事？ 私はリディア・ロマノフ、ロマノフ帝國皇女です！」

「この飛行機は？」

「聖地付近で発見しました、航続距離が長いから亡命に使用しましたが途中で

燃料がきれて…」

「メイジ達の力で飛んできました」

「そうか…」

「とりあえず…国に言う必要がありますね」

「そうだな、よし皆さんついてきてください」

とうとう、ロマノフ帝國はソビエト連邦、ソ連になってしまった
この後、皇帝自身からとんでもない事が言われる

2 ロマノフ皇帝亡命（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております
あと鉄道の路線名募集中です

3 大戦の予感 1（前書き）

ハルケギニアの地名は似てても場所が違ったりします

3 大戦の予感 1

4月1日、ロマノフ帝國皇帝、ゲオルギー・ロマノフらが亡命したことはすぐさま報道された
それと同時にロマノフがソ連になったことも報道された

4月2日

東京・首相官邸の一室

一代大日本帝國内閣總理大臣、東郷

「もう大丈夫なのですか？」

「はい、それほどひどい傷ではないので…」

「それで…なにがあつたのか具体的に話してもらいますか？」

「はい…ええ実はあの変な箱」

ロマノフはテレビに指をさした

「テレビです」

「そう、そのテレビで報道されてる通り、我が国は滅ぼされました…」

「そして…ソビエトが誕生してしまいました…」

「そう…ですか…」

「我々はなんとか生き延びました、我が息子、次の皇帝となる予定

であつた

セルゲイ皇太子や娘のリディアなども」

「女房は既に病死しているのではありませんが…」

「あと一緒に亡命してきたのはメイジです」

「なるほど…航続距離オーバーでも飛んでこれたわけですか…」

「そうですか…大変でしたね」

「前々から我々もこの事態を危惧していましたが…まさか本当にそうなるとは」

「本当ですよ」

「同盟国である中華帝国も大和帝国の台湾という島に亡命政府を…」

「ほとんど共産主義が広まっています…」

「この時代に、共産主義に走ってしまう要素があるのですか？」

「いやあ…うちの国も貴族が多いので…とくにはないとは思いましたが…」

「貴族の多くは、アルビオンへ亡命しましたが…」

「…ところで共産主義者の正体…ご存知ですか？」

「正体…ですか？」

「本当に貧乏な人間中にもいますが…中核となっているのはエルフです」

「エルフ？」

「^{サハラ}砂漠を拠点とする奴らです、恐ろしく強い奴らで人間が10倍の兵力を」

使つてようやく勝てるレベルです」

「なんと…それほどの戦力がなければ倒せないのですか」

「ええ、しかもそれで勝つたとしても、戦局になんら影響はないのです」

「それで…そのエルフがどうして共産主義革命を？」

「実は…共産主義というのは名ばかりで…本当はエルフの人間撲滅計画の

一環だと私は思います」

「撲滅…計画…といいますと？」

「ご存知ではないのですか？ エルフは人間を見下しています、敵視しています」

「彼らは絶対、人間を滅ぼしたいはずなのです」

「確かに彼らの力ならば全世界を征服する事も可能ではあると思います」

「なんせ…彼らは…ハルケギニア再考の先住魔法の使い手の戦士が多く

存在しているのも最強種族である理由の一つではありますが…

場違いな工芸品…つまりあなた方が軍隊で使用しているものを数え切れないくらい

保有しているのです」

「…なんですって…？」

「どこの国の装備が殆どか…わかります？」

「わかりません、ただあなた方が保有している鉄の馬やゲルマニアが保有していた鉄の馬とは

ちよつと違います」

「見た目の造りは簡単そうで時間をかければメイジ達でも造れそう……なのですが……」

「性能が半端ではありません……、ゲルマニアの鉄の馬を鹵獲運用したのですが……負けました」

「簡素な造りで強い戦車……まちがいない我々の世界のソビエトの戦車です！」

「あなた方の世界にもソビエトが！？ 鉄の馬……いや戦車でしたな、あなた方の世界のソビエトの戦車を……なぜエルフが……」

「確かに聖地からは場違いな工芸品がよく発見されますが……」

「それにしたって急にエルフはなんで……だって彼らは平和主義者の筈！」

ドンツ！

「なんで人間を利用して人間を撲滅しようとするのか！
いくらなんでも突然すぎる！理解ができない！」

「皇帝……落ち着いてください」

「なるべく、平和的な手段で、どうにかしたいと思います……」

「本当……ですか？」

「はい、しかし戦争になった場合は覚悟してください、貴方の話を聞く限り、

エルフは強敵です」

「しかも中華帝國やロマノフの軍隊もとられてしまいました…連合でも勝てるかどうか…」

東郷はこう考えた、インド付近からこの近くまでがエルフの領土で新たに中華帝國と

ロマノフがエルフの領土に加わった、しかもエルフは半端じゃなく数がいてすべてのエルフ

がすぐれた魔法をつかえしかもソ連製の兵器を多数保有している…国だとすれば超大国である

物量もあるだろう、10倍の兵力を使ってようやく1個大隊を倒せる実力を持つエルフ

中華帝國やロマノフ帝國さえ倒してしまう、戦って勝てる保障がない

（そういえば…大和帝國はビルマまで進出していたな、どうなんだ？紛争が起こったりとかはしないのか？）

その夜、ロマノフ皇帝一家とそれに従うメイジ達は母機がある空軍基地で生活

することにした、部屋は士官クラスの立派なものが用意された

3 大戦の予感 1（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

4 大戦の予感 2

4月3日、丁度この日国連の首脳会談が行われた

「三田村首相、ちょっと質問があるのですが、よいですか？」

「なんでもございましょうか？」

「インド、特にビルマらへんから先、今話題のエルフがありませんか？」

ビルマとは、インド中央付近である、現実とは場所が違う
大和帝國の領土である

東郷の予想したことを三田村に質問する
すると…

「ええ、多くのエルフが存在しています」

「…そうですか」

「それで…戦った事は？」

「あります」

「勝敗は？」

「我が国が劣勢でありました、敵軍は強力な魔法を使い戦車や航空機、艦艇まで

もっています」

「ええ？」

「ほ…ほんとうですか？」

各国の首脳が驚く

「本当です、軍の人間が言っておりまして」

「我が国が100年前ビルマから先への進軍を断念した理由はエルフです」

「そうですね」

やはりエルフとはとんでもなく強い奴らしい

続いて会談はアンリエッタとルイズの話題になった

「依然二人は行方不明です」

「全力を挙げての搜索活動は無意味なのではというほど見つかりません」

引き続き二人の搜索は続ける事になった

ほかソ連が侵攻してくる可能性がある、連合軍が到着するまで現在のゲルマニア軍は

持ちこたえられる戦力がない、そのためゲルマニア軍の制限を解除する動きもみえた

ゲルマニア国王のキュルケも戦力制限解除を求めた

やはりソ連とエルフに対抗するためであった

一方満州国ではソ連・中国が隣国である為さらに大和帝國と接触、

互いに陸軍力及び空軍力の強化を決定した

大日本帝國空軍はロマンノフ皇帝が乗ってきたTu95のような爆撃機を迎撃するために

ケンペル中佐が開発した高高度局地戦闘機「震電改」を東海岸部に建設される基地に

配備することを決定、

一方のソ連も場違いな工芸品innソ連兵器の配備を進めていった

4月6日、ゲルマニア軍の制限が解除されることになり軍備が整うまで

ガリア軍が各基地に駐屯、ガリア軍も新型兵器の開発に熱心になりアルビオンも

貴族の敵である共産主義に抵抗すべく軍事力を高める方針である

東西冷戦が始まった、直接戦火を交えることのない冷たい戦いが始まった

西側 -

大日本帝國：指揮官 - 大元帥：健介、元帥：東郷

ガリア王国：指揮官 - シヤンタル

大和帝國：指揮官 - 大元帥：大照天皇、元帥：三田村

満州国：指揮官：溥儀

ゲルマニア：指揮官 - キュルケ

神聖アルビオン共和国：指揮官 - ヘンリー・クルセイダー（アルビオン新皇帝）

クルデンホルフ国：指揮官 - 大元帥：健介

元帥：ベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルデンホルフ
(グルデンホルフ国首相、元姫)

ロマノフ帝国亡命政権：指揮官・ゲオルギー・ロマノフ
中華帝国亡命政権：

東側 -

見せ掛け共産主義、実は全部エルフとの話が…

ソ連：指揮官・ヨシフ・マヤコフスキー

中華人民共和国・毛沢三（ネタ）

エルフ・テュリユーク

現時点で西側の国のほとんどが役立たず状態、専門家によれば今回の冷戦での超大国は
西側は日本・ガリア・大和、東側はソ連、中国、エルフとなる予想である

4月10日、両陣営での軍拡競争で緊張する中、東京へ何隻もの軍艦らしき船がやってきた

4 大戦の予感 2（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

5 黒船来航 上

東京、港 -

「さあ！ さあ！ うめえぞ！」

港の市場では今日も競りが行われていた

「なあ アンタあ？ あれなんだと思う？」

「ああ？」

「なにつて軍艦だろ？」

「確かに見た目はそうだけどどこの国のだあ？」

「そりゃあおめえ日本に決まってるんだろ」

「でもよお、旗が違うぜ」

旗は、現実世界の人間から見たらどうみても星条旗だった

「ありゃなんだ！？」

「どこの軍艦だ！？」

海軍航空隊 -

閃光3機と神山5機、九七艦攻が8機、フル武装で向かった

ブオオオオ...

「こりゃあ...アメリカ軍だな」

「嘘つけ！　ここはハルケギニアだぞ！？　アメリカ軍がいるわけない！」

「でも、あの船の旗を見る限りは...」

海軍艦艇の一部、駆逐艦5隻 -

ザアアア...

「様子を見て、攻撃してくるようであれば交戦を認めるとの事だ」

「というわけで総員、戦闘位置につけ！」

「はい！」

日本にとっての3年間の平和はここでぶち壊されてしまうのか？

アメリカ軍らしき海軍は巡洋艦四隻であった、

艦艇のレベルは19世紀ごろのようだ

ドン！

ドン！

ドン！

ドン！

「謎の艦隊が砲撃したぞ！」

「まだ戦うな！ あれは空砲だ！」

「奴ら…日本になんの用だ…今のはまちがいなく脅しだ」

第一駆逐艦隊、謎の巡洋艦の艦隊の前に現れる

ブオオオオ…

「閣下！ なにか空に…対空砲ですか！？」

「いや、空砲だ」

「攻撃許可は！？」

「ダメだ、そのまま飛んでいる」

「了解！ 一時間後に別部隊と交代します！」

「うむ、しっかり見張っておれ」

一方謎の海軍…

「閣下、日本の船となにかしらないが飛んでいる物があります」

「ん、ようやく我が国は産業革命が始まり装備を近代化したというのに…」

「他の部隊は？」

「はい、戦艦4隻が後方にいます」

「連絡しろ、最近開発した電報ならすぐだろ？」

「はい」

一方戦艦部隊 -

「わかりました、ただちにそちらへ行きます」

ブオオオ...

だが戦艦による艦隊の上には偵察機がいた

「閣下！ 戦艦四隻が東京へ航海を始めました、距離は約8000
です」

「...、こちらにも巡洋艦2隻と戦艦1隻をもつてきてくれ」
「それで数は五分になる」

「はい！」

軍港 -

「出航！ 1秒でも送れたら絶対のせないぞー！」
「5分前には準備を済ませろー！」

突然、星条旗を揚げた謎の艦隊が東京に迫った

アメリカもハルケニアにいるのか？ それとも別の国か？
そしてなんの目的で日本へ？

5 黒船来航 上（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

6 黒船来航 下

ザアアア

4月10日午前11時23分、東京沖の緊張が高まる

日本軍は巡洋艦2隻と戦艦1隻を、アメリカ軍らしき謎の艦隊は戦艦四隻を向かわせていた

港 -

「ありゃあ…うちの国の軍艦の向こうの軍艦向かい合ってるぞ」

「こりゃあ一戦ありそうだな」

「なあに！ 日本は大戦で勝利したんだぞ！ 前のロマリアのような腰抜けじゃないさ！」

ドン！

ドン！

「うわっ！ まただ！」

「心配すんなあ、どうせ空砲だろ？」

日本海軍艦隊 -

「閣下…あいつら勝手に測量を行っているらしいですよ」「

「どうしますか？」

「んー、戦争は避けたい」

「威嚇だけして追っ払おう」

「わかりました」

「こちらも空砲を撃て」

「はい！」

タタタッ

「撃て！ 空砲を撃て！」

カチャ

ドン！ ドン！ ドン！

謎の艦隊 -

「閣下、向こうも撃ってきましたね」

「脅迫のつもりだろう」

「しかし戦争は避けたい、二人を上陸させなければならぬ」
「極力、戦いのないようがんばってくれ」

「はい」

11時42分、日本海軍戦艦巡洋艦駆逐艦合わせて8隻と謎の艦隊
戦艦巡洋艦合わせて8隻が
向かい合った

「向こうも同じ数艦艇を用意してきましたね」

「こちらに警戒しているみたいだな」

両軍とも、戦闘は避けたいようであった

しかしその夢も謎の艦隊の一隻の巡洋艦に仕業で崩れさってしまった

「あれは、我が軍に対しての挑発だ、砲撃を開始しろ」

「砲撃開始」

どん！

日本海軍 -

「実弾を撃ってきた！」

「閣下！」

「やむをえない…戦闘を開始する」

「敵艦を、全隻撃沈せよ！」

「航空隊にも伝える、攻撃開始だ」

「はい！」

6 黒船来航 下（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

7 東京沖海戦

正午、戦闘が開始された

謎の艦隊旗艦 -

「サラトガが砲撃を開始しました！」

「あの馬鹿！ 仕方がない！ 戦闘を行う！」

「あの二人を上陸させるためなら武装兵も上陸させるぞ！」

「はい！」

ドン！

ドン！

ドン！

ついに始まってしまった互いに避けたかった戦い

ドゴオオオ！

「閣下！ サラトガの船体が二つに！」

「なんだと！？」

タタタッ

「…なんたる事だ…あの船があっさり撃沈されようとは…」

ドン！

ドン！

航空隊 -

ブオオオ…

「魚雷投下！」

「投下！」

ボチャン…

ドゴオオオン！！！！

12時15分

「我が軍の損害は！？」

「ありません！」

「敵は！？」

「四隻を撃沈！」

謎の艦隊旗艦 -

「…悔しいが日本軍は強すぎる…」

「撤退する…」

「撤退…するんですか？」

「やむをえない、全滅するよりはマシだ」

ザアアア…

「敵艦隊！ 撤退を開始！」

「追撃しますか！？」

「いや、その必要はない」

「わかりました！ 総員！ やめ！」

ドン！

こうして、目的も不明、国籍もアメリカのように見えるがわからない謎の艦隊との戦いが終わった

4隻を撃沈、日本軍の損害はなしだった

2時間後…

空軍基地 -

「草加、東京沖で国籍不明の軍隊と戦いがあつたらしいな」

「ああ、まあ我が軍が勝つたらしいけどな」

ガチャッ

「あつ！ ロマノフ皇帝！」

「先ほどの話を聞いたが…私は正体を知っています」

「本当ですか！？」

「…合衆国メリケン」

「メリケン？…軍が言うアメリカの事だな…」

草加は元々大和帝國の国民であつた今は日本国籍を取得し日本国民だ軍では現実世界の事も教えている、その為ハルケギニア住民の草加も詳しくはないがアメリカを知っていた

「我が国が最も警戒していた国です」

「…といますと？」

「とにかく軍事力が半端ではなく高いのです」

「産業革命…という我が国にはあまり縁のない革命が進み独自の強力な兵器を保有しており

その数はわからないが滅茶苦茶多いらしい」

「手ごわい国を…相手にしましたな」

確かにメリケン…つまりアメリカは手ごわいだろう、ハルケギニアの人々にとっては

しかしさつさと産業革命を終わらせた大和帝國や産業革命からだいぶ後の世界からきた

日本軍にとっては雑魚にすぎなかった

19世紀の軍艦vs20世紀の軍艦、同じ数+航空機もあるとなれば話にならない

「しかし…なんのために…そのメリケンって国はこちらに来たんでしょうか…」

「わかりませんが…まあ植民地にでもしたいのではないでしょうが？」

「…やそうですね」

「警戒はしたほうがよろしいと思います、この近海にも現れるほど近くまで

迫っているらしいですからね」

「わかりました」

「まあ、草加、俺らに言われても意味はないけどな」

「そういえばそうだな、ロマノフ皇帝、そういう話は、俺たちよりも階級が上の人に

してほしいです、我々に話したところでなんの影響にもなりませんで」

「そりゃあ…そうだな！わかりました」

タッタッタツ…

その後、ガリアとゲルマニアとの会談が行われた -

「…メリケン？ なんですかそれ？」

キュルケが訊く

「どうも、大国らしいのです」

「大国…ですか…」

シャンタルが不安げに言った

ガチャツ

「大変です！ 大和帝國とそり…メリケンがオアフ島で戦ったらしいです！」

「なんですと！？」

「それで？」

「大和帝國の勝利でした」

「そうか…」

「忙しいわね、私の隣じゃあエルフだの共産主義だの向こうじゃメリケンだの

依然としてルイズもアンリエッタも見つからないわ…」

「もしかして…ハルケギニア西部は今、悪夢の序曲にあるのではないだろうか…」

「…とにかく、合衆国メリケンの対策もたてなければならぬようですな」

「ええ」

その他、冷戦関係の話題ではゲルマニアに九五式軽戦車と九七式中戦車を譲渡する事が決まった

7 東京沖海戦（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

8 未確認飛行物体出現！？

夜中、東京、空軍基地、滑走路 -

ちなみにこの滑走路は厚保という後からつけた地名の所にある

タッタッタツ…

「…」

徹也が外に出ていた、綺麗な満月だった

本当に月にはウサギがいてウサギが月を整備しているかのようにだった

タッタッタツ…

「ん？」

「あつ」

「えっと…リディア皇女…でしたっけ？」

「あつ はい」

「眠れなくて」

「俺は暇だったんで」

「そっなんですか」

「…」

「…」

しばらく二人は沈黙した

「綺麗…ですね」

「ん？」

「空」

「ここは東京つつたつて結構内陸ですから、都会の灯りに影響されないですよ」

「そうなんですか」

「…ロマノフの空もこんな感じでした」

「あそこは北ですし、季節によってはすごく綺麗な星空が見れそうですね」

お互いに敬語で話し合う二人だった

徹也は自分よりもご身分が高い皇女様ということで
リディアは自分よりも年上のお兄さんということ

「ええ、そうですね」

「…」

「…」

また二人は黙り込む
そしてリディアが話題を持ってきた

「あの…未確認飛行物体って知ってます？」

「え？　な…なんですかそれ？」

「もしかして…飛行機と勘違いしたただけなのかも知れませんが…」
「それでも変な形をしているんです」

「どんな形？」

「翼がない…感じで…丸いようなくばっているような感じで…
そして色が黒くて
中々見つけるのが難しくてしかも速くて…」

「な…なんでしょうか？　試作機でしょうかね？」

「さ…さあ？」

ゴオオオオオオ…

「な…なんだ？」

「この音…飛行機にしては変わっているな」

草加か。きいた事がないこの音は、ジェットエンジンだ
上空を見ると星空が輝く

「なにも…ないですね」

「ええ」

その時

「な…なんだありや…」

「あ…あれもしかして…」

変わった形の物体が飛んでいた、リディアの証言どおりだ
その形…まちがいなく全翼機である

ジェットエンジンの音がすごい

タタタタッ

ほかの軍人もやってきた

「なんだあれ!？」

「なんか飛んでるぞ!」

「俺ら疲れてるのか!？」

「皆! なにをしている! 就寝時間だぞ!」

「しかし…」

「ん? あ…あれは?」

気が付いたらほとんどの者が集まっていた

すぐにレーダーを使うも…

「なにも映りません！」

「馬鹿をいうな！　だって飛行機が飛んでいるんだぞ！」

「しかし！　レーダーは！」

「どうなっているんだ…」

その後：謎の飛行機は去っていった：レーダーにも反応しない航空機
翌日極秘でケンペル中佐に伝えられた

ケンペル中佐によるとレーダーに映らない全翼機というものらしい
しかし何故全翼機がハルケギニアにあるのかは謎だった
次々と謎は日本を襲う

8 未確認飛行物体出現！？（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

9 土くれのフーケ

ある日：全翼機の話題で盛り上がっている頃

大日本帝國は華族の家に連続で泥棒が入るといふ事件が発生していた

一部地域では5名の警察官が応戦するも5名全員返り討ちにあい殺された

そこで国は陸軍をあちこちに配備した

街に配備された陸軍の装備もあまりいいものではない、三八式歩兵銃に十四年式拳銃と

士官クラスに軍刀が渡されたのみであった

それでも、特に貴族の集中する空軍基地が近くにある日本名、厚木には1000名の

陸軍軍人が配備された

ちよつと空軍は嫌気がさした

「陸軍が街中ずらつと並んでてさあ、飛行機すら飛ばしづらい空気だ」

「まったく、はやくどつかいってくれないかな」

「おい長田、お前おっぱらつてくれないか？」

「冗談じゃないぜ、そんなことできるか」

タッタッタッ

「まあ、それほどでもないと思えない相手なんだろう」

「しかしですねえ……」

「警察官でも相手にならないときたら次にくるのは軍隊だろう」

「……ですよ」

夜 -

ここからはしばらく、陸軍視点でお楽しみください

「ふああ……」

「眠い……」

「まったくだぜ……なんで俺らがこんな任務を……」

「こらー！！ 貴様ら！！ 今なんて言った！！」

「はい！！ 決死の覚悟で泥棒から国民を守ると……」

「そうか、ならばよろしい」

タッタッタツ……

「これだから内地は……」

「上官は怖いし、はあ……」

シュタツ！

陸軍が気が付かぬ間に、すでに泥棒の姿はあった

「ふふ、軍隊ごときが私の相手ではないわ……」

「今は……フフツお国の為に盗みを敢行するだけ」

シュタツ！

「ん！？」

「どうした原口上等兵？」

「いえ、さつき人の気配が」

「友軍だろ」

「は……はあ……」

その時、ちよつと離れた所から陸軍の軍人の声が聞こえた

「貴様！ 何者！！ うわあああ！！」

「なんだ！？」

「今の声は沖田だ！！ 沖田ア！」

タタタッ

皆、沖田の元に駆けつける

そこでみたものは…

「ひどい…」

遺体はひどく破損している

惨殺されたらしい

「気をつける！ 敵はすぐ近くにいます！」

最初に事に気が付いた26人の集団、索敵を開始した

「ぬああ…！」

「今のは佐々木！ 佐々木！！ おい佐々木！！」

「ぐ…ああ…やられました…」

「佐々木！！ しつかりしろ！！」

「自分はもうダメです…それより敵を…」

「敵は！？」

「…後ろです！！」

「なんだと！！」

「ツハハハハハ！ 私に気づかないとは大日本帝國軍もたいしたことはないのね」

「なんだ！？ 女！？」

「そうよ とう！」

シュタツ！

突如現れたのは緑色の髪であり眼鏡をかけていて若くは見るがちょっと

年増に見える女性だった

カチャ

「何者だ貴様！」

「私は土くれのフーケ、一時は人前から姿を消したがあいかわらず貴族がむかつくんでね、貴族を総ナメにしてやろうかと思ったのよ！」

「なんだとおこの年増女！」

「年増ですつてええ！！」

「なんにしても、貴方達が私に勝つことはできなわよ」

「なんだとお！？」

「力ずくでやってみる？」

「この野郎！ よくも友を！」

陸軍、26名は一斉に攻撃を開始したがフーケは銃弾を何事もなくかわす

そして巨大なゴーレムを3体作り出した

「うわわわ！！ ゴーレムだ！！」

「かつての大戦参加者はいないのか！？」

「いません！」

「くそお… 大戦参加者ならこんなの恐れもしないのだが…」

「ッハハハハッ！ 所詮日本なんてその程度なのよ！」

「ハハハハ！」

フーケの口からは日本を批判することばかりがでた
日本軍の軍人達は心の底から怒った
力の源に火がついたのである

「貴様… 日本を散々いいやがって！」

「許さんぞ！」

「行くぞ！ 皇軍！ 突撃！」

26名全員でゴーレムに突撃を開始した

パン！

パン！

ゴーレムに集中射撃を行う、一体を倒す

「13名！半分にわかれて攻撃を開始する！」

大和魂あるものの、全力を尽くしての攻撃にゴーレムは屈する
あつというまに3体のゴーレムは倒される

「ええい！　こうなったら物量作戦よ！　そっちが26人ならこっちは52体だ！」

なんと本当に52体のゴーレムを作り出した
パワーアップしたフーケの実力である

「くそ！　我々の倍以上の戦力だ！」

「隊長！」

「なんだ！？　原口！」

「私は決死の攻撃、突撃を行います！」

「しかし」

「敵が私を攻撃するのを隙に、攻撃してください！」

「私は命など！惜しくはありません！国の為に！天皇陛下の為にこの命を奉げます！」

「原口：わかった、がんばれ！」

「はい！」

「どう作戦をたてよう！ 日本軍に勝ち目はないわよ！」

自殺行為である決死の攻撃、万歳突撃を原口は敢行した

「バンザイ！」

…原口は戦死した、勇ましく、そして激しく

いくらゴーレムとはいえ自ら自殺をするような攻撃には流石に驚いた
その頃、別の場所から20名、陸軍がやってきた

「援護するぞ！」

「げっ！ まずい！」

次々とゴーレムを包囲していきそして倒す、ゴーレムとはいえども
近代兵器の前には

無力である、攻撃があたれば歩兵など簡単に倒せるのだが
強力な銃を持っている日本の歩兵に近づくことはできなかった

ゴーレムは10分ぐらいで全滅した

「ちっ さらばー！」

「待て！ どこへいく！」

タタタタッ…

「…」

「土くれのフーケが、中々やりおる奴だった」

フーケとの戦いでこれまでに警察官5名、陸軍軍人3名が亡くなった

フーケの二つ名から「土くれ事件」と命名された

9 土くれのフーケ（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

10 日本人の女の子

ある日、厚木空軍基地にある男が送られた

「草加少尉、ちょっと」

「はい？」

主役だというのに久々の活躍な気がする徹也、彼が呼ばれた理由とは
「貴方と同じ、士官学校卒特殊飛行部隊に所属する友がきました」

「そうですか」

「本当は士官学校卒ではないのですが、特殊能力っていうか滅茶苦
茶操縦がうまくて

その…なぜか最初っから士官に…」

「はあ？ いまいち意味がわかりませんが、とりあえずあいたいで
すな、その人と」

「わかりました、ではついてきてください」

徹也が連れてかれた先には若い男がいた

「若いな…名前は？」

「俺ですか、平賀才人です」

3年前、旧トリスティンで発見されたゼロの使い間の主役だ

濱口だったかに撃墜され戦死したとされてきたがたまたま猟師に発見され
日本人であることからルイズもない今、正式に大日本帝国の国民となった

「ほう、歳は？」

「いや…長年森に潜んでたんで…なんていうか正確には覚えてなくて…」

「でも成人はしているはずですよ」

「そうか、まあ階級は同じ少尉だ、気軽に話してくれ」

「えっ？ いいんですか？」

「まあ」

「あ、ありがとう」

才人が空軍の操縦士として新たに加わった

才人は当初、現実の日本に戻りたいと思っていたが今やすっかり大日本帝国になじんでいた

横井伍長並の適応力である

昼食時 -

戦力のほとんどが陸軍だというので才人はてっきり塩と米しかくえないと思っていたが

「空軍って結構いいもの食べているんですね」

「陸軍から分離してすこし余裕ができたのでね」

食堂の人間がいう

たしかに栄養バランスのとれたいい食材を使用していた

「それに、我が国は、小規模な戦いであっても、戦時国家ではありませので、周囲は

ほとんど友好国ですし、食材が手に入りやすいのです」

「そうなんですか」

「よお平賀少尉」

「あつ 草加少尉」

「ちょっと話をきいてくれ」

「はい？」

ヒソヒソ

「えっ？」

「頼む！ これだけは俺苦手なんだ！」

「わかりましたよ食べますよ」

「すまん」

タタタツ

「草加？ なにしてきたんだ？」

「うるさい長田、お前には関係ないだろ」

「そうか…」

ブオオ…

「ん？ なんの音だ？」

タッタッタ

「！！」

徹也が見たものは2機の戦闘機だ

「空中戦をしている」

一機は日本からは退役しガリア・大和、そして一部がゲルマニアへと売却された

日本海軍の零式艦上戦闘機、もう一機は徹也にはわからない、ただマークからしてソ連製のレシプロ戦闘機だ

「一体どういうことだ？ あれは零式戦、むこうは機種はわからないがソ連の戦闘機」

「日本からは引退してほかの国で主力戦闘機を勤めているってのになんで

日本海軍塗装で飛んでいるんだあの零式戦？」

「さあ…？」

「あっ！！」

その時、零式戦に火がついた、被弾したんだろう

「やられたぞ！」

「おい！ どうする！？」

「あっ！ 零式戦の操縦士がパラシュートで降りている」

「パラシュートつけていたのか、日本海軍じゃ珍しい」
タッタッタツ…

そこに歩いてきたのは航空司令官の坂本少将だ

「領空侵犯機をおっぱえ、最悪撃墜も許可する」

「はっ！」

「それから、零式戦の操縦士、パラシュートで降りたのなら多分生きています」

「誰かここまでつれてきくれ」

「自分がいきます！」

徹也が名乗り出た

「平賀少尉」

徹也は才人の肩に手を乗せて言った

「初陣だ、思う存分戦って来い」

「は…はい」

徹也もここで飛べば初陣であつた、しかし初陣を才人に譲つた
実は食つてすぐに動いた腹がいたかつたのである

基地からは隼が3機、離陸していった

整備兵

「七式戦闘機か――一式戦闘機のほうがよかったのでは？」

「敵は一機だ、隼で十分だろう、それに隼のほうが運動性能で優れる」

「そうですか」

その頃、徹也ら3名は落下地点へ向かつた

「こりゃあ…」

「女の子だ…」

「見た目からして日本人！」

「いや、まて、こんな服装している日本人は私、今までみたことが
ありません」

この中に一人、現実日本出身の男がいた
彼がいうに服装は日本人ではないらしい
もっとも昭和初期の基準からであるが

「息は!？」

「あります!」

「気絶しているだけか、とりあえず運ぶぞ」

「はい!」

少女はすぐに医務室へ運搬された

一方隼戦闘隊は現実のソ連製と思われる戦闘機を撃墜した

10 日本人の女の子（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

才人が生存していて空軍にいきなり士官として入った理由は後ほど外伝でも

ちなみに日本人の少女はゼロの使い魔のあるゲームのオリジナルキヤラです

一応ヒントのつまりですが…もうネタバレですね
予想はついてと思いますですが次回をお楽しみに

11 平成の日本人

医務室 -

「命に別状はありません、ただし相当疲労しているみたいですね」

「そうでありますか」

次第にみんな去る

才人もどこかで見た事のある人物だと思いながら去る
そして草加も仕事があるので去った

夜 -

「ん…んん…」

少女は目を覚ました

「あれ？ ーじー…どー？」

タッタッタッ…

少女は行動を開始した、ドアをあけ廊下に出ようとしたり
なにか隣の部屋から声が聞こえた

「おやすみなさい」

「誰かいるの？」

ガチャッ

「！」

「ん？」

部屋からでてきたのは徹也だった

「ああ、目が覚めたのかい」

「えっ？ あ…のなにが？」

「零式戦から脱出しパラシュートでおりて気絶していたのを私が発見し

3名ほどで助けました」

「えっ？ ここどこ？」

「厚木空軍基地」

「空軍！？ ここどこなんですか！？」

「大日本帝國」

「え…何年…？」

「ん…と2611年だよ」

「えっ？ ええ！？ えええ！？」

「一体なにがなんだか…わからない！」

「俺はなんでも嬢ちゃんが零式戦を操縦していたのか気になる」

「えと…私は…学校帰りに気が付いたら変な所にいて、それで変な人たちに囲まれて

隙を見て逃げ出したら…」

「たまたまそこにさっき私が操縦していた飛行機があつて、よくわかんなかったけどなんとか飛ばせて、どこかへ逃げようとしたら終われて

つでやられて…脱出して…そこまでしか覚えてません」

「いろいろあつたみたいだな」

「まあ、今夜はゆっくり休むといい」

「詳しい事は明日聞くよ」

「は、はい」

翌日 -

徹也は朝食を済ませたあと言ったとおり医務室へ向かう

ガチッ

「あつ おはようございます」

「おはよう、眠れた？」

「はい！」

「いきなりで、悪いが君はどこから来たんだい？」

「えっと…その…」

少女は気が付いたら、見た事も聞いたこともない場所にいたためよくわからなかった

「…」

ガチャ

そこへ現実出身者の長沼中尉がやってきた

「草加少尉」

「はい！」

「どうだい？」

「いえ、さっぱりです」

「どこからきたのかもわからないらしくて」

「そうか…」

「でも学校帰りとかは言っていました」

「はい、そういえば学校帰りでした！」

「ってことはそれは制服？」

「はい」

少女は学校帰りだったらしい

その証拠に、制服を着ていた

しかし昭和初期の日本の基準からは考えられない制服だった

「…わからない…日本にそんな制服をつかっている学校はなかった
…」

長沼がつぶやく、少女は反論した

「そんなことはありません！ 今高校では大体これが主流です！」

「こ…高校？」

「高校…高校…高等学校の略か？」

「だとしたら…話がおかしい、女子は入学できなかったはず」

「はあ？ 貴方達一体なんなのですか？ 普通共学ですよ」

「えっ？」

「なんだって！？」

「おちつけ」

徹也は冷静だった

「大変、失礼しました」

「いや…別にいいけど、ここ日本っていてもなんか違うし、だいたい古い戦闘機

みたいなのがあちこちにあるし別世界かなあとは思ってたので」

「まず、聞きたいことは、先ほど別世界といたしましたよね、別世界からきたとしてどこの国の人間でしたか？」

「日本よ、二・ホ・ン」

「…時代は？」

「平成にきまつてるじゃないですか」

「平成…平賀少尉が言うには昭和の次の時代…」

「私は大和帝國出身なんで時代とかはよくはわかりませんが、とにかく日本人なのですね？」

「はい…」

「…実は我が軍にも一人、平成出身者がおります」

「えっ!？」

「平賀才人、日本空軍少尉、彼のほうが平成について詳しいでしょう」

「ついてきてもらえますか？」

「はい」

（平賀…才人？ 聞いた事ある名前…）

徹也は少女を才人の部屋へ連れて行った
ガチャッ

「あつ 草加少尉」

「やあ、君に会ってほしい人物がいるんだ」

「はい？」

「昨日私が救出した零式戦のパイロットだ、どうも平成の人間らしい」

「えっ？」

才人は目の前に立っている人に驚いた
どこかで見た事ある人物だった

（この人…どこかでみたこと…ってかこの人俺のクラスメイトじゃないか！）

「あつ！」

「？」

「貴方もしかして…平賀くん！？」

「えっ？まさか高風さん！？」

「知り合いか、平賀少尉」

「はい、俺のクラスメイトです」

「クラスメイト？」

「つまり…その…同じ教室にいた仲間ってことです」

「そうか」

「あ、紹介が遅れました！ 私高風春奈、見ての通り17歳の女子高生です！」

「ああ、こちらにも紹介が送れた、日本空軍少尉、草加徹也であります」

「って17！？…平賀少尉と年齢があわないぞ」

「えっ？」

たしかに、才人は時がたって成人しているというのに彼女は17歳である

そんな謎を解決すべく才人が自説を言った

「きっと、多少過去の時代からきたのでは？」

「ええっ？」

「余計わからんぞ平賀少尉」

「そんなこといわれなくても…」

「でも不思議、平賀くんが年上なんて」

「ま…まあなんかの間違いでそうになったんだし、どんまいっす！」

なにがどうなったかは不明、ただちょっと時間がズレたのか才人の同級生だった春奈は
才人よりも年下になってしまった

「そうか、では、運命の再開にちよつと水をさすようで悪いけどあの零式戦は

どこで手に入れたんだい？」

「えつと…飛ばされた先で…見つけました」

「んも、わかんないから滅茶苦茶にやったら操縦できました！」

「ハハハ…ある意味才能だな…」

「それでどこにいたんですか？ 方角はわかりますか？」

「あつちです」

春奈は東側からやってきたらしい
…ということはエルフの領土である

「昨晚の変な奴らとはエルフのことでは」

「エルフ！？」

「えっ？ エルフってなんですか？」

「この世界を支配しかけている連中だ、元々は平和主義者だが最近
は中国とロマノフを
ぶんどって本格的に人間を倒そうとしているんだ」

「ってことは…私」

「人間だから狙われたのではないだろうか」

「そうだったんですか」

「そつえばあいつは！？ 私を追った人！」

「平賀少尉らの蓄戦により撃墜した」

「そうだったんですか…ありがとうございます平賀君」

「い…いやあ、領空侵犯機はどのみち対処しなければいけないし」

「それと、草加さん、助けに来てましてありがとうございます」

「大和人と日本人、国、世界は違っても同じ場所を領土に同じ血が流れている民族だよ」

「そんな人をほっとけはしないよ」

春奈はどちらかといえば敵を倒してくれた才人よりも自分の命を助けてくれた

徹也に感謝していた

確かにあのまま放置されていたらじきに衰弱し命はあぶなかったろう

11 平成の日本人（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

コメントでもう出てましたが

正解は高風春奈でした^ ^

12 徹也と春奈の夜（前書き）

タイトル？ああ、物語は全然エッチじゃないです^

^

12 徹也と春奈の夜

翌日4月16日、午後

だいが春奈についてわかってきた頃である
春奈をどうするかが話し合われた

つでその結果春奈は居場所もないためしばらく空軍基地の施設に住
ませる事にした
しかし部屋がない

部屋の関係で徹也は個室をつかっていた、ある意味待遇はいい気が
する

だが個室の理由は人数が多すぎて個室となっただけである

任務を終えた後6時くらい

コンコンッ

「はい」

ガチャッ

草加少尉の所属する航空隊の隊長、鹿野大尉だ

「鹿野大尉 どんな御用でありますか？」

「うむ、実は高風さんの事なんだが、ロマノフ皇帝ご一家もおり兵

員も満員で

部屋がないのです」

「それで、草加少尉、しばらく高風さんを貴方の部屋で生活させてやってください」

「なっ！　なんですって!？」

ある意味最悪だ、絶対勘違いされると草加は瞬時に悟った

しかし部屋がないのならしかたがない、いつまでも医務室を使わせるわけにもいかないので
しょうがなく、許可した

その頃、予備役として退役はしているものの稼動可能状態で保存されていた

零式艦上戦闘機五二甲型が届いた、何故かされか現役復帰すること
が決定され

再び零式艦上戦闘機がデビューする予定である

夜 -

「あ…あの草加さん」

「ん？　なんだ？」

「私これからシャワー浴びるんで…見ないでくださいね」

「見ないよ」

ガタン

「ふう…」

タツタツタツ

（しかしとんでもないことになった…生活しずらいつたりや
ありやしねえぞ…）

明日まで暇なので徹也はラジオでも聞くことにした

カチャ

）

国を出てから幾月ぞ

「なんの軍歌だこれ？」

大和帝國出身の徹也が知るはずない、これは愛馬行進曲とい
うかの名将、栗林忠道陸軍大將がかかわった事で有名な曲である
軽快なメロディーと馬への愛情を歌った曲で当時国民に広く愛唱さ
れた

曲が終わる…

「なるほど、いい曲だ、ガリアやゲルマニアはまだ騎兵科が主流だし
プレゼントしたくなる」

ガリアは戦車の維持に金がかかるため安価かつ機動性にすぐれる馬
を今も愛用する

ゲルマニアは日本軍から送られた戦車以外ろくな装備がなくまた金

もないため

ガリアとほぼ同じ理由で騎兵が存在する

日本軍にも騎兵はあるが、戦車隊の戦力増強で数は減っている
そのほか、アルビオン軍やロマノフ軍は近代化が進まず騎兵が主流である

クルデンホルフ軍は憲法で制限されているため僅かな騎兵隊が存在するのみで

残りは歩兵である

満州国と中華帝国は地盤が悪いため重い戦車の運用はさけないのである

その為機甲師団はわずかしかなく騎兵師団が多く存在する

大和帝国は島国で戦争時、南洋の島で戦うことになる想定し戦車も軽量かつ快速なもの

がおおい、それを支援する形で騎兵科が存在する

メリケン合衆国は不明、ちなみにメリケン軍と大和軍の交戦はとつくの前に終了した

このように、騎兵はハルケギニアのほぼ全域で存在する兵科であった
特にゲルマニア、アルビオン、クルデンホルフなど日本やガリアに比べると後進国である国々

は戦車の配備が進まず、また法により配備できない為、騎兵は重要な兵科である

しかもこれらの国々は近代装備すらされていないのである、
剣や槍、火縄銃やマスケット銃がほとんどである

ただしアルビオンでは戦車を開発中という情報がある
また今月の2日、竜騎士と木造航空戦艦2隻、そして

日本製である九六式艦上戦闘機3機、九七式戦闘機8機による空軍を再編したことを宣言した

近年はソ連や中国、エルフとの冷戦もあり国連はゲネマニア空軍の再編も考えていた

カチャッ

「また、民放のくだらない放送が始まった」

「高齢者向けだろうからつまらんことこの上なしだ」

「テレビはなにをやっている」

昨年の春、ケンペル中佐の工場で働く例の平成から来た技術者ら数名によって

元あるテレビを元にカラーテレビが開発された

画質は今のものに比べると劣るがカラー事態珍しい為、日本国民がらみれば

気になる要素がなかった

平成のマスコミとはちがいひどい偏見放送はなく極めて健全なテレビを

ハルケギニアの大日本帝国のマスコミは流していた

）

眠れよレディーとかいう昭和の歌謡曲っぽい歌が流れていた
だが徹也は…

「この歌手…下手だな…」

歌詞とか以前に歌が下手ということにつっこんだ

「あの、草加さん？」

「ん？ 高風さん、あがったの？」

「はい、次いいですよ」

「ああ、ありがたい」

徹也はシャワーを浴びる事にした

ガチャッ

春奈の目は最初にテレビにいった

「あつ！ この世界にもテレビってあるんだ！」

「しかもカラー！」

「へえ…あんまり私の世界の日本とかわらないのね」

「続いては敵は幾万です」

「邪は正に勝ちたがる、正義の軍、皇軍！敵は幾万！」

敵は幾万ありとても

「すごい歌ね、軍歌みたい」

「てかこれ聞いた事あるかも…」

実は、春奈の父親はミリタリーオタクであったりする
たまにゲームで空中戦をしている所を見てたりする、その為、適当
にやってたら

零式戦を操縦できたのかもしれない、もちろん才能もあるかもしれないが

父は休みの日、よく軍歌を聞くため春奈は歌詞や曲名はしらなくても
メロディーである曲かくらいはわかるようになっていた

「まあ、この世界の日本、軍隊あるしね」

「それにしても平賀くんなんで軍人になってたんだろう…」

「まあいいか！」

敵は幾万の次は、普通の、ラブソングみたいなのが流れた

「あ、ちょっと古臭いけどいい曲」

春奈は正直だった、ちょっと古臭いのは仕様である

ガチャッ

「あれ？ 早いですね」

「ん？ シャワーなんて5分くらいじゃないの？」

「ええ！？ ちゃんと洗ってるんですか？」

「洗う所は洗ったよ」

「そお？」

くんくん…

春奈は徹也の臭いをかぐ

（これは…はてしなく恥ずかしい…）

「んゝ、よし！」

臭くないらしい

「さて、寝ましょ」

「そうだな、えっと布団がないな…」

「とってくる」

数分後

「よいしょっと… あ、ベッドは使っていいよ」

「え？ いいんですか？」

「女の子を床にしいた布団で寝かせるわけにはいかないよ」

「あの…その…ありがとうございます！」

「行き先も出身もよくわからない身で失礼ですが使わせていただきます！」

夜中 -

（ま、ベッドで寝るようになったのは軍にはいつてからだし、苦痛じゃないからな）

徹也は春奈の顔を見つめる

（よくみたらこの娘、かわいいな…）

（って俺なに考えてるんだ？）

（明日も早い、寝なければ）

こうして一日が終わった

12 徹也と春奈の夜（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

13 メリケンから来たあの二人

4月17日早朝、東京に一隻の船が来航した

「星条旗だ」

「でも今度は軍艦じゃなくて普通の客船だ」

メリケンらしい、どうやら戦闘を避けるため軍艦での来航はやめたらしい

客船を撃沈するわけにもいかずとりあえず来航を許可した

海軍中将、宇和島一郎

「貴方は？」

「私は、メリケン海軍代将、マイケル・ペリーだ」

「貴方は？」

「私は日本海軍中将、宇和島一郎です」

「うむ、実は日本にお願いがあるので」

「あなた方の天皇陛下にお会いしたいという二人がおりまして、やつてまいりました、

以前もその目的できたところ、攻撃を加えられました」

「もし、今回も、攻撃をしかけたり、交渉を断つたりしたら」

「その時は、わかりますよね？」

「……」

ペリー、現実でいうマシユ・ペリー

彼の言う、わかりますよね？とは戦争の事だ

彼は攻撃はもちろん拒否も許さない、どちらかの行為を行った場合日メ間は戦争になると警告した

もしかして二人に天皇陛下を殺されるかもしれない

しかし戦争はなるべく避けたい、宇和島中将は苦悩の末、とりあえずは上陸を許可した

その後もペリーは宮城で近衛師団などでもこの警告を行い通過してゆき

いよいよ天皇、健介の部屋まで来た

宮城、天皇陛下の間 -

「貴方がペリー、という者ですか」

健介の周りには有事の時の為、近衛師団の兵士がずらりと並ぶ

「私がペリーであります」

「ところでこれはなんですか？ 居づらいではありませんか？」

「…そうですね、皆さん下がって結構です」

「しかし！」

「折角のお客さんに失礼ですぞ」

健介は天皇らしく言う

「はっ！ 陛下がそういわれるのでありましたら！」
「かしなにかあった場合はすぐにお呼びください」

「了解」

ガララ…

兵士達はさつてゆく

「ふう…これで本題が話せますね」

「いったいどのようなご用でわざわざ遠くから？」

「実は、亡国の人間が貴方にお会いしたいと」

「亡国、ですか？」

「ええ、トリステイン王国だから」

「！！」

ペリーの口からは亡き国家、トリステイン王国という国がでた
たしかあの国は連合軍と戦い戦争に負けクーデターだかで滅びた
政府関係者は亡命した、シエスタに限っては反政府団体を利用して
反乱を起こし銃殺に
されたぐらいだ

（いや、まてよ？ シエスタや今は日本で科学者やってるコルベールや

以前団体を利用して宮城を攻撃してきたシエスタがいた…)

(ということは王国の残党ぐらいいてもおかしくない)

(いるとしたら、メリケンという国がころほど協力している、メリケンに

亡命したのか?)

「では、私はこれで、後でお二人が参りますので」

「はい」

ガララ…

バタッ

(誰だ? トリステインの残党とは?)

(ギーシュ、いやあいつはニューギニア島の指揮官やってて自決したって話だ)

(それとも元空軍元帥モンモランシー?、奴も亡命したらしい)

ガラララ…

「!」

健介は目の前に現れた人物に驚いた

そう、トリステインの国家元首とその義理の姉妹となり第2の王位継承権を得たあの女だった

「貴女達は!？」

「お久しぶりです、濱口少尉、いや天皇陛下でしたね」

「それ以前に私の最終階級は大尉です」

「そうでしたか」

久しぶりだという挨拶をアンリエッタは言った
会話はさらに続いた

「貴方も、随分偉くなりましたね」

「そうね、所詮平民の士官の最下級クラスが今や天皇って国家の最高地位だもね」

アンリエッタもルイズも健介が急に偉くなったことを褒めたんだか
あきれたんだか、
とりあえず言った

「ははは、なんでも自分以外に思い当たる人物がいなかったと、軍の関係者は言ってますよ」

「私は、貴方達が生存していたことに驚きですよ」

一応、敬語で喋る健介だった

「国家崩壊前に皆で逃げたんです」

「まったく、その途中でシエスタとはぐれるはコルベールのハゲともはぐれるわ」

「みんなどこに逃げたのよ」

「…」

健介は困った、シエスタは反乱軍の指揮官になりそして一日の戦闘の末、亡くなった

こんな事をいえば彼女たちの味方をしているメリケンと戦争になる

「さあ…わかりませんね」

「そりゃそうでしょうね、敵国だった国には誰も亡命しませんよ」

「もう、みんな死んじゃうし、みんなどこかへ消えちゃうし」

「才人とかも…帰ってきなさいよ！使い魔の癖に！」

「…」

敵だったとはいえ、健介にも良心はある
再会させてあげようと思った

「ルイズ…でしたっけ？」

「え？ うん」

「実は平賀才人は生きておりますよ」

「ええ！？ 嘘！？ オバケじゃなくて！？」

「現在、空軍で士官でもやっていますよ、彼飛行機の操縦技術が卓越していたもんで」

「早くその…くっ…くっ…」

「空軍…じゃないですか？」

「そう！ その空軍の基地に案内しなさいよ！」

ルイズは命令口調でいう、しかも天皇陛下に不敬罪で逮捕できそうなものだ

「いいですよ、ただし私の身柄の都合上勝手に出歩けませんので、すぐにでも

車を手配しますよ」

その後、特別に空軍基地までルイズらを送る為自動車を手配された日本には主に九五式小型乗用車、通称「くろがね四起」が多く存在する

この車両は元々軍用で文字通り、皇紀2595年（1935年）に登場した車両だ

最高速度は70キロ、最近開通した大日本国有鉄道、通称国鉄の車両よりは遅い

現在日本はこれが普通の乗用車となっておりお出かけや買い物にも丁度よかった

元々軍用で上り坂もそれなりに得意で悪路の通過性能も良好である

ド…ド…ド…ブロロロ…

近衛師団の兵士が空軍まで運転した

「あんまりまり心地よくないね」

「しょうがないじゃないですか、うちの国は自動車産業ほかの列強国に比べて

遅れているんですから」

たしかに日本は遅れていた、もちろんハルケギニアでは最先端の技術だが

ほかの列強に比べ、日本の自動車産業は今と違い劣っていた

「馬より早いですね」

「そりゃ馬より遅かったら誰も乗りません」

「でも馬より乗り心地悪い…」

元軍用のこの自動車はアンリエッタには好評だったがルイズには不評だった

「ガマンしてください、馬だったから時間がかかりかかります」

途中、海軍の基地が見えた

「…」

あれだけやったのにもうあんなに艦艇がある、アンリエッタは国力の差に愕然ときた

ブオオオオオ…

途中、海軍航空隊の戦闘機が数機飛んでいった

以前見た零式戦ではなかった、ケンペル中佐が開発した艦上戦闘機、

閃光だった

周囲の旅館からは女の子たちが手を振っていた
この日本では操縦士は人気者であった

そして、厚木空軍基地 -

ブオオオオ...

その頃、侵犯機がないか監視にいった徹也と才人と長田の3機が
帰還した

ブロロ...

「ふう、」

さてさて、才人とルイズは再会しそうである

13 メリケンから来たあの二人（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

14 トリステイン再建

ブロロ…

「おっ？ あの塗装は宮城の車じゃないですか？」

「そうだな、一体なんの用だ？」

「！」

中からはルイズとアンリエッタが降りてきた

「ルイズ！」

「えっ？」

「さ…才人！」

「才人！！」

その時、ルイズが才人にだきついた

「才人！ 馬鹿！ 死んじゃったと思ったじゃない！」

「すまんすまん」

「ちっ 仲よさそうだな、草加」

「そうだな、まあ平賀少尉もこれで幸せなんだろう」

はたしてそうなのであろうか？ どうせお仕置きが待っているのが

オチだろうと思われる

「あの、ルイズ？」

「へ？ 姫様？」

「私、ちょっと用事があるのですが」

「いっていいですよ、ここで才人の監視してるから」

「監視つて…」

「なんか奴隷っぽくない？」

「知るか俺が」

アンリエッタは再び車に乗った、今度は首相と話がしたいらしい国はすべての警察や軍に伝えた、戦犯として逮捕はするな、メリケンとの戦争に繋がると

首相官邸 -

内閣総理大臣、東郷

「…なるほど」

「つまりトリステイン王国の再建…ですか」

「ええ、その為にわざわざ国際連盟のトップである大日本帝國を訪れました」

「それは…首脳会談を行わなければなりません」

「戦争は避けたいものです、出来るだけ、協力しますよ」

「ありがとうございます」

皆、戦争は避けたいものであった

とりあえずアンリエッタのトリステイン再建に協力することにした
数日後、20日、国連本部 -

トリステイン再建は前々から計画されていたが王が見つからず。またかつての敵ではあるが

今は冷戦、そうこういつてる場合ではなく今は一国でも多く味方をつけるべきだと

わかっていた

またメリケンとの戦争も避ける必要があった

話し合いは22日まで続く、その結果、日本と大和、そしてアンリエッタ本人の交渉は成立し

5月1日、一応トリステインを独立させることにした、その日までに憲法を

多少改造する必要があった

また建国した所でまだ準備が完全ではない

トリステインでも半数が一致したが

ほかの意見はバラバラだ、100パーセントにすると王道派勢力が50パーセント、

むしろ大統領制にすべきと主張する32パーセント、連合軍にとって敵対勢力である

ソ連と同様共産主義国家になればいいと言っている共産主義勢力が

15パーセント

残りの3パーセントはトリステインに自治は不可能、ガリアの領土になればいいと主張している

24日、突然国連が民主主義的に選挙を行った所王道派は過半数をしめ

トリステインは王国として再びアンリエッタが統治することが決まった

しかしこれには反対するものも少なくはない

どうせ、また大戦の引き金になるのがオチだと主張する者が世界中に存在する

27日、独立が完全に決定した

28日より軍は撤退を開始、30日には完全に撤退

30日からは旧式ではあるが武器の配布が行われた

兵士は旧トリステイン軍と生活に困る者かつ適性検査に合格した者のみ採用した

そして5月1日、トリステイン第二王国が仮建国された

それと同時に次なる問題が発生した、才人の扱いである

才人はルイズの使い魔であるため本来トリステインに在るべきではないがすでに

日本人として大日本帝国国籍を取得、しかも空軍で士官をやっている

しかしトリステインの強い要望で2日、引渡し決定された

空軍 -

「平賀少尉、短い間ではあったが元気でな」

「はい、まあトリステインでの生活も慣れているようなものですし」

「そうか、またな」

「はい」

ラバウル小唄

さらば ラバウルよ また来るまでは

しばし 別れの 涙がにじむ

戀し懷し あの島 見れば

郷子の 葉かげに 十字星

何故か、ラバウルでもないのにこの歌が流された

3日、トリステイン第二王国が正式に建国された

14 トリステイン再建（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

さてさてメリケンの圧力もあつたりで突如

復活したトリステイン王国ですが、今度は味方なんでしょうかね？

15 ペトログラード事件 勃発

3日、国家復活パレードがトリステインのあちこちで行われた。そしてこの日、日メ親交条約が結ばれる、これは両国が今後、戦争を行わず

有効的な関係を築くというものだ

西側勢力にも次第に味方がついてゆく

一方この頃、ゲルマニアとソ連の間では対立が続いていた。それはロマノフ帝国時代からの争い、国境であるペトログラードの利権である

一応、以前の戦争ではここはゲルマニア領ということで停戦したが、ソ連はここを自国領としふたたび対立が再燃したのである

ゲ・ソ首脳会談

ソビエト連邦共産党書記長、ヨシフ・マヤコフスキー「...ということ、ここは我が国の領土であります」

キユルケ

「でも、ここはあたしの国の領土だったんですよ？」

「いや、敗戦国に言い分はない」

「確かに敗戦国かもしれないけど、それでもここは渡せないのよ」

「なるほど...この交渉を断れば...戦争になりますか？」

「…」

「わかりましたよ、もうすこし時間を頂ければ」

ゲルマニア政府 -

「どうしますか、首相」

「うーん どうするって言われても…」

「あそこは国連もうちの国ってことにしているし…」

「…しかしソ連の軍事力は半端ではなく高い、我が国が勝てるかどうか…」

「そうね、ゲルマニアの現時点の戦力は？」

「えっと 事実上の再軍備が始まってまだ間もなく、10個の普通の師団と

1個の機甲師団、それから日本より買った旧式の戦闘機と爆撃機による空軍が僅か、

海軍は今だ完全な復旧はされておらずです」

ゲルマニア軍の主な装備は歩兵は剣や槍、火縄銃やマスケットなどの旧式銃

一部に三八式歩兵銃が配備されているのみである
残りはメイジが数千人もいるくらいだ

そのほか機甲師団は日本軍の九五式軽戦車に九七式中戦車計63両、
ほとんどが軽戦車である

そのほか、分厚い甲冑を装備した騎兵隊が100

海軍はまだ新型艦ができておらず前の条約どおりの数、
空軍は練習の意味合いから日本より購入したのは設計は旧式、しか
し製造日はわりと最近の

九六式艦上戦闘機30機 九七式戦闘機58機 九九式艦上爆撃機2
0機

九七式艦上攻撃機25機のみである

対するソ連はエルフの支援ですでに5個の機甲師団が存在し普通の
師団はまだ数が特定できない場違いな工芸品のソ連製航空機も多数
存在、東洋には強力な海軍が存在する

圧倒的に国力が違う、ゲルマニアの勝ち目はほぼ無といっても過言
ではないだろう

もっともゲルマニアの実質的な再軍備は始まったばかりなのでしょ
うがない

「戦争をしたらまったく準備がととのってないわね」

だが翌日、悪夢が起こる

5月4日、早朝ペトログリード -

ドオン！

突然砲火が、赤い旗を揚げた大軍が迫ってくる

ソ連が侵攻してきた、ペトログリード占領の為に

悪夢の事態である、キュルケは全軍すぐに抗戦を開始せよと命令した

ゲルマニアの戦争参加戦力は

第2方面軍

第3師団、第4師団

第1機甲師団（戦車を動かせる日本人が大半）

（戦車第1連隊、戦車第2連隊 戦車第3連隊）

砲兵第1旅団

人数にして3万以上、しかしこれは現時点でのゲルマニア軍の戦力の主力である事を

忘れてはならない、制約が解除されたとはいえまだ1ヶ月、兵員はまだ5万台

これが壊滅すればゲルマニアは今よりも急激に弱体化する、いずれソ連領になるかもしれない

それを危惧しても今は自国の領土が危機、なんも抵抗しないよりはマシである

戦力の大半である3万を投入した

ゲルマニア軍の指揮はゲルマニア軍総司令官ハルデンベルグ侯爵自らが行った

彼は本来死んでいるはずだがレコンキスタとの戦いが日本軍主体であつたためたいていして

活躍はしなかった、大戦後、戦犯に問われるもなんとか無罪となった

「全軍！ 最後の一兵まで抵抗せよ！ これが命令である！」

ドンッ！

ハンデルベルグは机を叩く

「玉碎は許さない！ 1人が10人を倒す勢いで戦え！」

「そのうち国連が仲介して停戦の時が来るはずだ」

「その日まで、一日でも長くこのペトログラードを死守せよ！」

ゲルマニア軍将校

「消耗戦ともなれば我が軍は不利ではありますが」

「仕方ない、勝てる相手ではないのは存知であろう」

「今は一日でも長くここを守ることだ」

「あとは国連が早くに仲介することを祈ろう」

「そうですね、お言葉にそってやりましょう」

ゲルマニア軍はソ連軍を押し戻すよりもここで消耗戦を行い連合軍が仲介し

ソ連軍と停戦する事に望みをかけた

しかしこの決断は愚策というわけでもない

ゲルマニア軍にはどう考えてもソ連軍に勝てる見込みがないのである
その為、停戦を狙い出来る限り陣地を長く守りぬく消耗戦にもつれ
こむことにしたのである

実質ゲルマニアとソ連の戦闘は西側と東側の武力衝突であることから
連合軍が

仲介しないわけがないのである、停戦にもっていけばゲルマニアに
も多少、未来がある

15 ペトログラード事件 勃発（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

大戦以来ゲルマニア軍は始めて戦います

16 ペトログラード事件 決死隊

朝7時20分

ソ連軍戦車隊が先陣をきって攻撃を開始する

ドオン！

タタタタッ

「進め！ 行け！」

ゲルマニア軍も応戦を開始する

しかし歩兵が戦車に勝てるわけがない

カァン！

火縄銃やマスケット銃が戦車に通じるわけがない
そこで8時、ある特殊部隊が結成された

メイジによる歩武決死隊である

隊員はおよそ200名、かなりの数のメイジである

これは重武装である戦車に対して決して帰れぬ突撃を敢行し戦車の
弱点である上部、及び

後部の装甲が薄い所を行為力魔法で攻撃する

文字通りの決死隊である

なぜ、ゲルマニアがこのような無謀な攻撃を仕掛けようとするのか

実は戦後、ゲルマニア軍の教官の大半はトム島守備隊時代の日本軍将校である

隊長、ヒンデンプルク男爵

「皆、最後だ、酒を飲め」

ちつとも酔わない酒を飲む

隊員は戦後のゲルマニア陸軍の軍服のメイジクラスのものを着用

茶色の上下だ、隊員は神風特攻隊を模したのかゲルマニアの国旗に

「必勝」と書いてある

鉢巻を巻いていた

「よし！ 行くぞ！」

「はい！」

出撃の直前まで皆笑顔だった

ゲルマニア軍は新米メイジがほとんどの歩武決死隊に最初で最後の万歳突撃を行わせた

9時20分、一斉に決死隊は攻撃

「うおおおー！！」

「ゲルマニア万歳！！」

ドオン！

「うわああ!!」

多くの者が戦車に辿りつく前にやられた、しかし200名の大勢にもなれば

一回は成功する

数名ずつの集団にわかれ攻撃を開始した

まず5名の集団がBT-7快速戦車を一両撃破した

「ばんざーい!!」

歓声上がる

しかし彼らは帰れない、命令は撃破しても死ぬまで戦うことである
そのほかの集団も攻撃をしかける

「いくぞ! 突撃い!」

「続け! 戦車に突撃するぞ!」

「うおお!」

バババ

「ぎゃああ!!」

「うわああ!!」

「ぐあっ！ 糞お！」

「母ちゃん！！」

しかし多くの者が戦車砲や機関銃、さらに歩兵にやられるのであった
それでも、決死の攻撃を行う集団が多く存在した

「うおお！！！」

「万歳！」

攻撃は10時頃まで続いた

歩武決死隊は全滅、全員が玉となって砕けた

しかし戦車装甲車を13両撃破、至近魔法で7両に損害を与え予想
外の戦果を挙げた

だがこの行為をキュルケらが黙っているわけがない

キュルケは数年かけてようやく一人前になるメイジを無駄にしては
ならんと歩武決死隊を

批判し万歳突撃の敢行を禁じた、これ以降歩武決死隊のような組織
的万歳突撃は

行われる事はなかった

16 ペトログラード事件 決死隊（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

万歳突撃を許さず持久戦にもつれこみ

島を長く守った中川大佐、栗林中将、牛島中将らは

立派だと思います、ちなみに中川はペリリユー、

栗林は硫黄島、牛島は沖縄を守りました

17 ペトログラード事件 戦車戦

歩武決死隊の戦果を聞いてゲルマニア軍は予想よりも遙かに強い事を確信した

続いては押し寄せるソ連軍戦車隊と戦車戦による戦いを展開することにした

時に午後1時の事であった

師団長、道下中将（大和帝國出身）

「諸君！ 言える事はただ一つ！ 我が軍は強い！」

「無謀かと思われた決死隊が敵軍に多大なる損害を与えたのである！」

「それでさえあの戦果だ！ 通常攻撃はさらなる戦果となるだろう！」

「諸君の活躍ぶりに私は期待している！」

作戦は第3師団の第5歩兵連隊との共同で行われる事になった

歩兵連隊が囫になり油断している所を後ろから奇襲する攻撃である

1時18分、歩兵連隊が一斉攻撃を開始した

「行け！！とにかく行け！ 本格的な攻撃は戦車隊に任せろ」

タタタタッ

ババババ…

「ぎゃああー！」

現代の対戦車装備をもっていれば第二次世界大戦レベルの戦車などあつさり撃破できる

しかし旧式の装備しかもないゲルマニア軍歩兵が戦車に勝てるわけがない

次々とやられていった

しかしゲルマニア軍の思惑通りになった

ソ連軍戦車隊は歩兵攻撃にばかり目がいき後ろが隙だらけだったそこへ、ゲルマニア軍戦車隊が奇襲をかけた

ゴオオ…

「おい！ 敵戦車がきたぞ！」

「なんだと！？ はやく準備しろ！」

突然の来襲にソ連軍は混乱する
ドオン！

ドオン！

そしてソ連軍の後ろにびっしりならんだゲルマニア軍戦車隊は一斉に射撃を開始した

「まずいぞ！ このままならやられる！」

「よし！ 連絡しろ！」

対策をとろうとしたが彼らはもう手遅れだ
さらに砲兵も加わりソ連軍の戦車隊は壊滅しそうであった
しかしこちらの戦車も日本軍の旧式でしかも元々があまりいいもの
ではない、
第二次世界大戦でもハルケギニア世界大戦でも他国の戦車に苦戦を
強いた
あの九五式と九七式である

奇襲には成功するもゲルマニア軍は3両の戦車を失う

ドオン！

ドガアア！

その時後ろからソ連軍戦車隊の増援が来た

「移動開始！」

ブオオ…

ゲルマニア軍戦車隊は後ろに回ろうとするもその途中で撃破される
ものも少なくは
なかった、しかも今回の相手はあのドイツ戦車隊を震え上がらせた
T-34中戦車である

中戦車なら普通、九七式が抵抗できそうである、しかし九七式は歩
兵支援用にすぎず

対戦車戦をまったく想定していない為T-34に勝てる代物ではない

カァン！

カァン！

カァン！

T-34は傾斜装甲の採用により装甲厚のわりに丈夫である
ゲルマニア軍の戦車のあまり威力のない戦車砲では到底貫通不可能
である

「連隊長！ 我が軍の戦車は敵戦車の装甲を貫通させません！」

「なんだと！？」

「畜生…こうなったら精神力だ！ 精神力で戦え！」

「はい！」

T-34相手にも蓄戦しそして数両を撃破した、文字通り精神力だ
ろう

戦車隊の多くは大和帝國出身の軍人である、練度ではこちらが勝る
また弾の命中率も非常に高い

一応、戦車砲は魔法よりも強力であるため急所にさえあたれば撃破
可能である

ゲルマニア軍はソ連軍戦車隊を後ろから数台での集中砲撃で撃退した

夕方までにゲルマニア軍は28両の戦車を失うもソ連軍は53両の
戦車を失った

そしてこの日の戦闘は終了した

17 ペトログラード事件 戦車戦（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

18 ペトログラード事件 航空戦

5月5日早朝、再び戦闘が開始された

ドオン！

依然として国連は動かない、まだ情報が伝わっていないのかそれともソ連軍の実力を拝見するためにゲルマニア軍を利用しているのか

バアン！

ドオン！

カアアン！！

ドオン！

ドガアア！！

今日も地上では大規模な戦闘が行われていた
戦車隊はもちろん歩兵も必死の抵抗を行った

バババ…

「うわああ！！」

グサツ！

「ぐあ！」

グサツ！

グサツ！

武器はなくとも精神力でソ連軍の侵攻を食い止めた

しかし必死のゲルマニア軍に死の雨が降った

ヒューン！

ドオオオン！！！！

爆撃だ

制空権はまだゲルマニア軍のものではなかった

制空権を確保する為に一ヶ月前に設立された空軍は必死だった

多くのパイロットの練度が低い、しかしそれはソ連軍も同じであった

この日、ようやく空軍が動いた

ゲルマニア空軍ダリウス・ハルトマン大佐

「我がゲルマニアは、かつて航空先進国だった」

「それもわりと最近の話である」

「しかし空軍禁止令がでて後進国へと逆転した、しかし制限が解除され日本からの

支援で空軍の再編が行われた、先の大戦で戦ってくれた人々からみてもかっこわるくない

ように戦ってくれ」

「はい！」

ハルトマンは先の大戦の撃墜王である、彼の率いる航空隊がソ連空軍を相手に戦いを挑む

ブロロ…ブオオオ…ブオオオオオオオオオ…

「よし！ 続け！」

戦闘隊と爆撃隊が離陸した

戦場上空 -

ドン！

ドン！

ドン！

「対空砲にきをつけろよ！ 奴らのほうが一枚上手だ」

「はい！」

「隊長！ 右前方30度！ 敵機！」

「戦闘機です！」

「うむ、いくぞ！」

ブオオオ…

事件初の戦闘機同士の空中戦が始まった

ブオオオ…

ダダダダダ…

ダダダダダダ…

さっそくハルトマンが一機を撃墜

その操縦技術にソ連軍は目をつけ集中攻撃を開始した

しかしハルトマンは巧みな操縦でそれをかわす

後ろについたとしてもすぐに回避する

その技は神業であつた

あつという間に3機を撃墜した

一方新米パイロット達も奮闘していた

ダダダ…

ゴオオ

「よっしゃあ！ 一機やった！ あと四機で撃墜王だぜ！」

強大なソ連空軍を相手にゲルマニア空軍は善戦した

航空戦は互角だった

理由はソ連空軍は設立から時がたつておらずパイロットの質も悪い

ゲルマニアも似た状況であるがこっちはかつて戦ったベテランもいる

使用する機体もソ連軍はI-16に対してこっちは九六艦戦や九七戦などと

旧式ではあるものの航空産業が活発である日本の戦闘機である

飛行機の差もあるだろう

ダダダ…

一時間後、基地にはほぼ全機が帰還した

その日の戦闘はゲルマニア軍の攻勢により元の国境付近までソ連軍を押し戻す事に成功した

18 ペトログラード事件 航空戦（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

19 ペトログラード事件 ソ連軍5・6大攻勢

5月6日も戦闘が続く、しかし午前8時、

予想以上に強いゲルマニア軍に驚愕したヨシフ・マヤコフスキーは戦力増強を命令

更に多くのソ連軍がペトログラードに集結した

「敵の大軍だ!!」

「総員戦闘準備!」

ダダダ

激しい戦闘が続く

9時21分、すでにゲルマニア軍は1キロ後退した

よつぽどの数だ、ソ連軍は物量作戦に出た

質で劣るなら物量だという考えだ

戦争に物量は欠かせないもの、質だけなら日本軍のほうが上でも物量をものに

アメリカ軍は反抗してきて日本は負けた

質より量とはまさにこの事だ

ドオン!

この日までにゲルマニア軍は52両の戦車を失う、機甲師団のほとんどの戦車を

失ったゲルマニア軍は対戦車戦闘で勝てる見込みがほとんどなくなった

しかし砲兵旅団の活躍と残りの戦車の活躍で12時までには20両近い戦車を撃破した

ソ連軍の損失は予想外におおきかった

それでもひたすら物量、物量、そして物量で押してくるソ連軍に
ゲルマニア軍も悲鳴を上げ始めた

ブオオオ...

ダダダダ...

だが戦車は空中からの攻撃に弱い、空軍の総力を挙げた攻撃で25両のソ連軍戦車を
撃破した、歩兵にも機銃掃射で大きな損害を与えた

ドオン！

「弾がつかまりました！」

「もうだめです！　こうなったら突撃です！」

「待て！　ほかの戦車はもうだめとわかって突撃を行った奴がいるが
そういうわけにはいかない！」

「我が軍にはもう戦車が10両ほどまでに減っているのだ」

「そんな貴重な戦車をやすやすと体当たりで失ってたまるか！」

「これは国からお預かりいただいている神聖な兵器なのだぞ！」

「わかりました！」

兵士達は必死だ

ゲルマニア軍もソ連軍も

午後1時、ソ連軍またも大攻勢

今度の攻勢でさらにゲルマニア軍は後退する

午後2時にはついに戦車がなくなる

重装備騎兵隊が突進を行う

「ゆくぞ！」

被弾に強いこの騎兵隊は歩兵に対し圧倒的な戦闘力を誇るも
戦車に対しては無力だった

馬が死んでしまう、しかも重装備ゆえものすごく重い、兵士の疲労
がたまつてゆく

午後3時、ペトログラードの半分を占領される

「このまま進めば！ ペトログラードの奪還に成功するぞ！」

ソ連軍の士気は高かった

一方ゲルマニア軍も緒戦に比べると低下はしているものの士気は高
かった

あの日以来始めての戦争で自らの力を試したく、そして自国の領土
を守る為に

ヒューン！

ドゴオオ！！

3時半、ゲルマニア軍の大規模な爆撃が行われた

これには流石のソ連軍も悲鳴を上げた
それに便乗して第3師団が総攻撃を始めた

ソ連軍は後退する2キロ押し戻す事に成功した

そして午後4時、

大日本帝國を始めとする国連が仲介、停戦を呼びかけた

しかしマヤコフスキーは応じず戦いは続行された

しかし午後6時、膠着化した戦場に終わりは見えない、マヤコフスキーは停戦を受け入れる

その間にゲルマニア軍は1キロ後退する

そしてまた攻勢をかけようとしていた所だ

ゲルマニア・ソ連、

両軍共に全部隊に戦闘停止命令を下した

翌日の会談で国連はペトログラードはゲルマニの領土と宣言する
マヤコフスキーは仕方なく承認、こうして事件は終わり停戦となった
戦いの勝敗は引き分けだろうが実質はゲルマニアの勝利である
侵攻を受けた領土の確保に成功したのである

しかしこの戦いで両軍共に大きな損害を受けた

ゲルマニア軍は機甲師団が壊滅し砲もほとんど残っておらず第4師団がほぼ壊滅しかけた

対するソ連軍は多くの人間がなくなりまたゲルマニア以上に戦車、砲、航空機を失った

特に航空機の損害がひどいものであった

この戦いで両国は多くの軍事的教訓を得た

ソ連は軍全体の統制と戦術に問題があったとした
量的には勝るものの少数であるゲルマニア軍からかなりの損害を受けた

どう考えても戦術に問題があっただろう

また戦車は歩兵支援専用と考えていた為本格的な戦車戦は行えず
逆に組織的にまとまっていたゲルマニア軍戦車隊に苦戦を強いられた

ゲルマニアは戦車そのものの性能が問題視された

日本製の戦車はひ弱かつ火力もない、唯一の機動性もソ連戦車がほぼ同じ特性をもっている
ので効果がないのであった

また航空機も問題視された、運動性能や加速力、上昇力はソ連に比べて圧倒的に優れる

ものの低速かつ被弾に弱く剛性も低い為急降下が不得意である
大戦時bf109を使用していたゲルマニア軍にとって日本の航空機は不評であった

また西側諸国もソ連軍は力はあるとしても作戦などに問題がある事を学んだ

しかしこれからは改善されるだろうと睨みそれにあわせて軍事力をあげていくつもりである

この戦いは世界大戦には発展しなかった
しかしエルフは人間を笑った

この程度の戦いであれほど損害をつけるとはたいした事ないと思っただのである

またゲルマニアはハルケギニアの国々にまだ準備が整っていないゲルマニアも

そこその力を持っていることを証明した

19 ペトログラード事件 ソ連軍5・6大攻勢（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

世界大戦にならなくてよかったですね

20 まさかの地球へ

停戦から2日、5月8日の夜、厚木空軍基地 -

テレビではあの事件のニュースが流されていた

じい

春奈は満月を見ていた

「ん？ 高風さんなに見てるんですか？」

「えっ？ 見てくださいよ！ ほら！ 綺麗な満月ですよ！」

「おお、これは確かにきれいだ」

・
・
・

満月を見ていたら徹也は次第にこんな事を思い始めた

「なあ、高風さん？」

「なに？」

「月ってどうなっているんだろう」

「なにつて、なにもないですよ？」

「そうなの？」

「ええ、だって私の世界ではとっくの昔に月明着陸に成功していますし」

「ええ！？ ちょっとその話を聞かせてくれ！」

「いいですよ、私もあんまり詳しくはありませんが」

二人は月や宇宙の話で盛り上がった

勤勉な徹也は熱心に春奈の話を聞いた

「そうか…」

・
・
・

「いつてみたいな、月に」

「ムリですよ ロケットとかスペースシャトルとかなかったら」

「ロケット？ ロケットとは？」

「えっと…その…」

春奈は迷いながら説明した

「なるほど、大出力噴進発動機の力で空中へ、そして大気圏とやらを抜けて宇宙へいくのか…」

「間違つてたらごめんなさい！ 私もあり詳しくないので！」

「いやいいよ、そのうちこの世界でも宇宙に行ける日が来ると思うよ」

「すでにこれほど文明が発展しているんだし」

「そうですよね」

「…」

「しかし、月へはムリでも一度近づいてみたいな」

「そうですか？」

「そうだ、明日はどうせ休暇だし、許可が出たら月の近くまで行ってみるか」

「お月見ですか！？ いいですね！ 私も連れてってください！」

上官と交渉したところ許可がでたので行く事にした

ブロロ…

機体は艦上爆撃機「蒼星^{そうせい}」、元々海軍機だが使い勝手の良さから空軍でも急降下爆撃機として使用されている

「よし！ いくぞー！」

「はい！」

ブオオオ…

蒼星は離陸した

大出力エンジン、榮照一^{えいしょう}一型を搭載、最高速度は628キロ
急降下に長けている艦上爆撃機としてはかなり高性能な部類に入る、
しかも高度8000までは元気に飛べるという高空性能も備える

「今日は快晴だな」

「見晴らしいですね」

（高風さん喜んでる、よかった）

なにがいいんだか、徹也はもしかすると春奈の事が好きなのかもしれないが
真相は不明である

「あつ！見て見て！ 真正面にお月さまですよ！」

「綺麗だな」

「…ってあれ？ 近づいてない？」

「えっ？ あつ！本当だ！？」

「あ…あれ？」

…

突然、何かに飲み込まれた気がした、そして出た先は
春奈にとって、また似たような国に住んでいた徹也にとって懐かしい感じがした

ブオオオ…

「えっ！？　ここどこ！？」

「草加さん！　ここどこですか！？」

「知らないぞ」

「まずい、この飛行機燃料があまりない」

「えっ！？」

「…あそこになら降りれそうだ」

「よし！　強行着陸を行う！」

「はいい！？」

そして、徹也は無事に着陸した、はたしてここはどこなのだろうか？

20 まさかの地球へ（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております
この設定だったらゼロの使い魔一期で終わりそうですね

21 平成の世の地球

朝 -

しょうがないので二人は飛行機の中で寝ていた
そして徹也が最初に目を覚ました

「ん？」

「ん……」

「……朝か……」

「んん、おはようございます草加ちゃん……むにゅ……」

すっかりお寝ぼけモードの春奈だ

タツ

徹也は蒼星から降りる

「……飛行場だな……ここは」

「ひこーじょ……えっ!？」

「どうした高風さん？」

「ここ近所にある飛行場じゃん!」

「近所？」

「うん! 私の家の近くにある飛行場です!」

「…とすればここは平賀少尉や高風さんの日本でいう、平成」

「うんうん！　そうです！」

「帰れました！！」

「…ここが…平成…日本」

「雰囲気は大和帝國にそっくりだ」

「あれ？　あんたたちだ…」

突然、論陣が歩いてきた、そして…

「うお！　日本海軍色の航空機！　それなんて飛行機ですか！？」

「えっ？　これ？　蒼星」

「蒼星！？　そんな航空機日本軍にあつたっけか！？」

ありません

「ってかそこにいるの春奈ちゃんじゃん」

「あつ、栗林おじいさんお久しぶりです」

「おう、春奈、久しぶりじゃー！」

「そっちの男は彼氏かい？」

「違いますよー、命の恩人ですよ」

徹也の事は命の恩人と思っているみたいだ

「ほう、まあいいや、それよりアンタ現役の操縦士っぽいな」

「まあ…一応そうですが」

「ちょっと手伝ってくれ」

老人に手伝ってくれと頼まれて徹也は老人を手伝った彼の飛行機の手配だ、その飛行機に徹也は驚いた

「これ、零式戦じゃないですか」

「そう、零式艦上戦闘機、零戦じゃ！」

「しかも二一型という」

「はあ」

「じゃあわしゃちよっくら遊びに飛んでくる」

「太陽が月につっこめば、ぐふふ」

「ほんじゃ！」

ブオオオオオ…

「変わった爺さんだな」

「そうですね、若い頃海軍のパイロットだったらしいので青春に浸りたいのか週一回はあのぜろなんだかったの操縦してますよ」

フッ

「あれ？」

突然、太陽のほうに飛んでいった零戦が消えた

「消えた…どういうことだ？」

「さあ…？」

そこで士官学校卒のエリートである徹也はなんとなくわかった

「あつ！俺ら月につっこんでここにきたじゃん！」

「そうだよね…ってまさか！」

「そうだ！そういえばあの老人も月か太陽に突っ込めばぐふふだから…！」

なんとなくわかった気がした、
月と太陽、ハルケギニアへの入り口であるのだ
ただし平成の

「…なるほど…」

「…そういうわけなら俺は戻れるな、よかった」

「あの…私も一緒に戻りたいです」

「えっ？なんで？」

「ぶっちゃけて言えばあの世界のほうがおもしろいです」

「そうか、じゃあ帰るか」

「あつ！ そのまえに草加さん！ 探検しましょ」

「えっ？」

「一応この世界について知りたくありませんか？」

「うむ、興味はある」

「じゃあいきましょう！」

こうして徹也は春奈の提案で平成の日本を探検することにした
ちなみに栗林の目的はハルケギニアのかわいい女の子をナンパする
ことである（あら不純）

21 平成の世の地球（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております
栗林おじいちゃん一体誰をナンパに？

22 徹也と春奈の航空ショー

給油して二人は蒼星に乗り込んだ

ブオオオオオ...

たまたま迷い込んでしまった現実の地球の国、日本国
その日本を2日間の休暇で探検することにした

「随分栄えてるんだな」

「そうですよ、あっちの日本よりもいろいろ進んでるんですよ」

「どのくらい？」

「そうですね、この飛行機がもう旧式で使えないくらいです」

「そうなんだ」

ブオオオ...

更に飛行する

「あつ 飛行場がある」

「あ！ あれは航空自衛隊の基地です！ 上空飛ぶと怪しまれますよ？」

「航空自衛隊？」

「はい、私の日本は憲法上軍隊をもてないのです」

「何故？」

「戦争に負けてそうなった歴史があるんです」

「なるほど、軍の人が言っていた、大東亜戦争か」

「だ…大東亜戦争？」

春奈は太平洋戦争ならわかるが大東亜戦争という称号は知らなかった

「東亜と太平洋を戦場にした帝国と連合軍の戦いつていつてた」

「ああ！太平洋戦争の事ですか！」

「太平洋戦争？」

「大東亜戦争つてやつの今の呼び方…でしょうか？そんな感じですよ」

「なるほど、つで航空自衛隊つて？」

「はい！軍隊をもてないので朝鮮戦争をさかえに発達した軍隊にかわって

国を守る組織ですよ」

「実質軍隊じゃないか？」

「そうですね、まあ軍隊と違って先制攻撃は許されないんですよ」

「それにお父さん曰く対地攻撃能力だったのが低いんですよ」

「そうか」

「つで航空自衛隊とは空軍にかわるものか？」

「そうです」

「なるほど、どんな飛行機をつかってるのか見てみたい」

「えっ？ でも基地祭でもしないかぎり……」

「あれ基地祭じゃない？」

「えっ？」

なんと今日はたまたま航空自衛隊の基地祭だった
大勢の人々がいた

「よし、着陸は不可能らしいからで直そう」

「ええ！？ 飛行機乗った意味ないじゃないですか！」

そして、1時間後

ゴオオオオ……

丁度曲芸飛行を行っている所だった

「な……なんじゃこりゃー！！」

見たこともない徹夜にとって未来の戦闘機に驚くのは当たり前だ

「ブルーインパルスっていうアクロバットチームです」

「なるほど、我が軍も度々行っ曲芸飛行の専門チームがあるのか」

「はい！」

春奈は特に飛行機に興味があるわけでもないが楽しかったらしい
また徹也も見えた事もないものを沢山見れて楽しかったという

この夜、春奈の家に泊まった

親がアメリカにいつてていない為、また旅館に泊まる金もないため
である

22 徹也と春奈の航空ショー（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

23 徹也と春奈のin秋葉原

日食とか月食とかでもないのに何故かハルケギニアと現実世界は繋がっていた

つで月につつこんで平成の現実日本にきてしまった徹也とその世界に帰還した春奈

二人はハルケギニアに戻る予定だが春奈の提案で徹夜にこの世界を知ってもらおうと

ちよつと探検するのであつた

今日はまず春奈の学校へいった
すぐにもどつてきた

「なにしてきたんだ？」

「んつと、退学届けだしてきました」

「えっ！？ 退学届け？ いいのか？」

「うん、もう戻る気もないですし」

「そうなんですか」

どうやら残りの人生をハルケギニアで過ごしたいらしい

「あの世界、面白そうですね」

「そうか」

こうして、別に将来にも困る事のないハルケギニアで生活すねことに決めた春奈は

最後の地球滞在日としてとことん今日という日を楽しむ事にした

ガタンゴトン…

「っでどこいくんだ？」

「えっと 秋葉原っておすすめですよ！」

「そ…そうなのか？」

「はい！」

秋葉原、ご存知一部の人们からみれば聖地である
そして、秋葉原 -

「……………」

徹也は絶望した、自分とにたような民族が、こんなものに興味をもっていたなんて！っ

「な…なんじゃこりゃ！」

「秋葉原ですよ、ア・キ・ハ・バ・ラ」

「それはわかった、でもなんすかこれ？」

「オタクよ、オ・タ・ク」

「オタク？ まあいいや、ごめん俺はこの空気にはなじめない」

「そう？ まあしょうがないですよ、元の世界がああじゃ」

「でも私、ちょっとここに寄りたかったんです」

「なんで？」

「ハルケギニア、おもしろい本がなくて暇です。家であったり
ったけの金で

DVDとかゲームとか漫画とか同人誌とか買おうかなって」

「なんぼあるんだ？」

「えっと…20万くらい」

「すごいな」

「家にあつた金全部ですよ」

「いいんですか？」

「まあ、貯金してたお金ですし、あつ！そつだまた親からの仕送り
金がたまったら

秋葉原つれてってくださいね！」

「それじゃ最終滞在日じゃないな」

「ハハハ…ドンマイです！」

同人誌売ってる店

「!!!!」

なんというか、徹也からみればしからん本ばかりであった
しかも内容はアアゝンなものが大半であった

「こ…これを読むのか？」

「うん」

「…」

（専用特殊収容本棚でも今度の休暇に作ろうかな、こんなのに囲まれてたら

俺の精神が崩れるかもしれない）

ゲーム屋 -

「これをこう操作すればできますよ」

「ど…どれ…」

徹也は春奈と格ゲーで対戦した
もちろん勝敗はベテランである春奈の勝利だった

「ははは！ 草加さん弱いですね！」

「う…うるさい！」

ちよっと顔を赤く染めて言った

「大丈夫です！ 最初は誰でも下手糞です！」

「そ…そうだな」

DVD屋

「…」

「これは普通にすごいと思う」

最近、あっちの日本でもアニメが放送されはじめたが鉄腕アトムレ
ベルであつた
カラーだけど

その為、今のアニメのすごさには関心した

「でしょ？」

「そ…そうか？」

「帰ったら見る？」

「ん、部屋の鍵しめたほうがよさそうだな」

帰ったらみる事にした、アニメのDVDとかゲームとか漫画とか
いろいろ買った

さらに家からもアニメのDVDとかゲームの機械とかいろいろもっ
て行って蒼星に
詰め込んだ

「う…わ…せまい」

「ガマンガマン！」

そして、ハルケギニアに戻った

基地の人からはなにを沢山かったのやらと怪しまれたがとりあえず

CDということに

しておいて徹也はごまかした

夜 -

二人はアニメをみてた

「こつちの世界のよりクオリティ高いな、技術の差か」

「そうでしょうね」

なんだかんだ言っただけ楽しかった

次に地球を訪れるとしたら…新しい作品確認しにいくぐらいだろうか？

そんなわけで徹也と春奈の楽しい地球訪問は終了した

23 徹也と春奈のin秋葉原（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

しかし二人は中野にはいかなかったんでしょうか？

24 謎の少女と春奈を狙う者たち

5月11日、ガリアとの国境付近にある日本軍の基地がある地方都市、

現実世界でいうミラノ、日本名張子

ドオン！！！！

「何事だ！？」

「なにか爆発したぞ！！」

タタタタッ

突然、基地が何者かに爆破された

ドオンン！！

「おい！ 町も攻撃されてるぞ！」

「なんだ！？ まさかガリア軍じゃないだろうな！？」

「そりゃないだろ！同盟国だろ！？」

「おゝい！！ こっちきてみる！！ 変な奴がおるぞ」

向かった先には女の子がいた、顔は見えないようにかくしている

「なんだ貴様は!!」

「あんたたちに知る必要はないよ! あいつの召喚位置を誤爆したから」

探しにきたと一緒についでに爆破したのよ」

「なんの目的だ!!」

「貴方達に目的を知る必要はないよ! 精々復旧作業がんばりなさいよ!

ハハハッ」

フッ

「き…きえた!?!」

ギオオオ…

「連隊長! 敵がいません!」

「どこに消えた!?!」

「おい! お前ら見てただろ!?! どこへ!!」

「突然消えました!」

「突然消えた!?! まあこの世界ならありえる話だ」

突然張子の陸軍基地が襲撃された
戦車連隊まで動員するも逃げられてしまった
はたして彼女は何者だろうか?

一方異変は厚木の空軍基地でも起こっていた

ブオオオオ…ギュッ！

「草加さん！」

「草加さん！」

「どうですか？ 新型は！？」

「おいおい新型ってほどでもないだろ、隼より一年前の戦闘機だよ」

空軍には旧式で海軍からも引退した零式艦上戦闘機の二一型改造版を正式採用した
そのテスト飛行を草加は行っていた

「速度に優れているな、急降下性能も隼より上だ
運動性能も新型機よりはいいし上昇にも優れている」

空軍が零戦に目をつけた理由は新型機の運動性能が隼よりも低下していたため
火力と速力に優れ隼にも劣らぬ運動性能と上昇力を持ち航続距離の長い飛行機が必要だった
将来あるであろう東側との戦争に備える為である

二一型の改造版は最初っから作り直したという、
548キロまで速度が上がり航続距離は二一型時をキープ
運動性能もそのまま、20ミリ機銃も125発まで、防漏タンクを
装備し最低限の防弾はあった

加速力、上昇力に劣るものの速度と航続距離は隼より長い
総合的に優れた戦闘機となった、また艦上戦闘機としても使用可能
である為

空軍は独自に空母を二隻造る事を決めた、これは軍隊としては異例
であつた

まさかの零戦の復活と空母製造発表はニュースで大きく取り上げら
れた

そして海軍不仲説まで浮上した、しかし空軍と海軍は仲良しであつた

「それで、武装は？」

「おいおい、俺は一発も撃ってないぜ」

「そうですか」

ドオオン！！

「なんだ！？」

「おい！！ 弾薬庫に火が！」

「なに！？」

ドゴオオオン！！！！

「ひでえ爆発だ……」

基地中にサイレンが響く

「すぐに消火しろ!!」

「航空機に被害が及ばぬようがんばってくれ!!」

「たった今入った情報です! どうやら張子の陸軍基地もやられたようです」

「各地で爆破事件か」

ドゴオオン!!

一方徹也は

ガチャツ

「草加さん! なんですかこの爆発音!？」

「高風さん! 大変だ! 何者かが弾薬庫に砲火したらしい」

「えっ?」

「すでに爆発しているがさらにでかい大爆発を起こすかもしれないぞ!」

「そうになったらここもぶっ飛ぶ!」

しかし、空軍の全員の努力で大事には至らなかった

しかし大量の弾薬と航空機7機を失い20名が死亡した

夜 -

「がちゃ…」

「よかったですね、大事にはならなくて」

「まったくだ、危なく厚木基地ごとブツ飛ぶ所だった」

「だがきをつけろ、不審者がいるって話だ」

「バタッ！」

「！！！」

そこに現れたのは魔道士らしき人物二名だった

「そいつを俺らにわたしな」

「なんだ貴様ら！？」

「てめえに関係ねえ！ そいつを渡せ」

「草加さん！」

「…速やかに撤退すれば黙っておいてやる、しかしもし攻撃に移るようであれば、その時はこちらもそれなりの対応をとらせてもらう」

「ケケケ…こいつら俺らの言うことかかないらしいぜ」

「平民ごときが…ぶっ殺してくれるわ！」

「！！！」

徹也は咄嗟に14年式拳銃をてにとり発砲した
魔道士らしき人物は倒れた

「!!」

「い…いいんですか!？」

「心配はない、俺たちは殺されようとした、正当防衛だよ」

「そうなんですか」

「しかし、あいつら高風さんを狙っているみたいだったな、なにを企んでいるんだ？」

「さ…さあ？」

「まあ、まずは報告だ、いつてくる」

徹也の戦闘は正当防衛とされなんも文句は言われなかった
しかし春奈を狙っていた2人、そして軍の基地の連続爆破、なにか
関連がありそうだ

24 謎の少女と春奈を狙う者たち（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

25 もう1人の人格

5月12日、全軍警戒態勢にあった
基地を爆破する輩がいるのである

陸地が空か、どこからやられるかはわからない

全陸軍基地では対空砲がいつでも発射できるよう用意された

また、基地の入り口付近には戦車や歩兵が多く配置された

空軍はいつでも多くの飛行機を飛ばせる体制に入った

海軍も船を沈められては困るので全部隊が警戒態勢に入った

町の中でも被害にあった場合どうするかなどの訓練が行われるなど、
もはや戦時中の国家の

ような状態だった

警察や軍は犯人の搜索に忙しいのであるが、依然見つかる気配はない

12日の正午、さらなる悪夢が発生する

爆破事件に便乗して反政府団体が武器をとり民衆や政府の建物などを襲撃した

ダダダ

「鎮圧しろ！」

「くそ…これほど事件が多発するとつかれるぜ…」

特に、団体の本拠地がある帝都東京での戦いが激しかった
廃車置場に捨ててあつた戦車3台を修復して団体が運用していたの
である

東京駅の前では激戦が繰り広げられた

ドオン！

ドオン！

ドオン！

「壊せ！国のものなんかぶっ壊してしまえ！」

団体の戦車は東京駅を砲撃する

すぐに近衛師団が駆けつけ応戦する

「おい！ 徹甲弾はないのか！？」

「榴弾しかありません！」

「まあいい！ どうせあの戦車は元々我が軍の戦車だ！ ぶっ壊せ
！」

ドオン！

ドオン！

激しい砲撃戦の末、団体の戦車は全滅した

その後も団体の武装集団との戦闘が帝都で続いた

ダダダ…

中には宮城に乗り込もうとしたものもいた

「決して奴らを中には入れるな！」

更に、田舎での戦闘は空軍の爆撃機が爆撃を行ったりもした
どうやら武装勢力はそうとう大きいものらしい

しかしこの集団を動かすきっかけをつくったのはまちがいに爆破
事件だ

一体なにものが行ったのだろう

空軍基地 -

ドゴオオ！！

「総員！戦闘準備！」

「敵はどうやら1人だ！ 皆銃を携帯していけ！」

厚木空軍基地に爆破事件の犯人がきたらしい

タタタッ

しかしどこにも見つからず

徹夜の部屋 -

バタッ！

タタタッ

徹也は14年式拳銃を手にとった

「よし！」

ふとみるとおびえている春奈がいた

「心配するな、すぐに鎮圧する」

冷静に徹也は言う

士官学校卒は違うものだ

「はい」

ガシヤアアン！

「！？」

カチャッ

「見つけたよ…春奈！」

「えっ！？ 誰！？」

そこに現れたのは、声は春奈と同じ、見た目も似ている
それともう1人いた

「何者だ？」

「ヴェザリー様！一時はどうなるかと思いましたね」

「まったくね、まったく召喚場所を誤爆してしまうなんて」

突如現れた謎の二人組み、こいつらが事件の黒幕か？

25 もう1人の人格（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

26 燃え尽きろ！！熱戦・烈戦・超激戦

12日、徹也の部屋

「何者だ貴様ら？」

「私はヴェザリー、メイジでもないのにそれなり生活をしゃがって」
「ただでさえメイジは嫌いだというのに」

「ヴェザリー様、どうしますか？ 春奈には男がいるみたいですよ」

「決まっている、撃破するのみ！」

ヴェザリーと名乗る女はメイジが嫌いらしい

「待て、その前にお前らの目的はなんだ？」

「メイジの撲滅と、お前らのように平民のくせに贅沢している奴らのあつまり国家、

大日本帝國を壊すことよ」

「つまり」

「そうよ、政府転覆よ、その為に反政府団体を利用したのに、つかえないわね」

「もう鎮圧されかけているって話じゃない」

「ヴェザリー様、やはりここは我々の力で！」

「そうね、我々だけでも十分勝てるわよね！」

「なに？」

すると、二人は徹夜に攻撃をしかけてきた

バキィ

「うっ！」

「草加さん！」

「なるほど、そちらがそのつもりならこっちもそれなりの対応をとらせてもらう」

さらに、春奈そっくりな彼女、アキナと申しますがアキナは手榴弾を投げてきた

「まずい！」

「草加さん」

カァンン！！

ドカァァ！

偶然あった野球のバットで春奈手榴弾をぶっ飛ばした
そして外で爆発した

「やった！ホームランですよ！」

「…」

「…危ない奴らだ、ここではお前らも負傷する」
「ついてこい」

タタタタッ

「ふん、やる気みたいね！」

「いきましょう！」

タタタタッ

徹也は春奈の手をひっぱって走る

春奈をおいていったら敵に捕らえられる可能性があるからだ

ここはだいぶ平地、ここなら思う存分戦闘が可能である

「大丈夫？草加さん、相手は二人組みですよ？」

「心配するな、銃はある」

タッタッタッ…

「さう始めましょうか」

カチッ

徹也は銃を発砲した！
しかし！

「あれ…」

「弾切れ…ですか？」

「しまった！ 補充するのを忘れていた」

「なんか知らないけどそれがないならこっちが有利！」
「はっ！」

二人は一斉に攻撃を仕掛けてくる
武器がないのでは徹也も抵抗できない
しかし9Gにも耐えるその体、防御力は高かった

「くっ！」

「草加さん！」

「これ！つかってください！」

渡されたの野球のさっきのバットだ
たしかに命中すれば威力はある

「これで少しは戦える！」

ブン！

ガン！

「いたっ！」

まずアキナに命中した

激しい殴り合いが続く

消火に忙しい皆は援軍に来る余裕などない

二人を相手に戦う徹也は次第に消耗していく

だからといって二人はなかなか徹也を倒せない
いい勝負だった

「ぜえ…ぜえ…」

「たかか棒一本で…手ごわい男ね」

「しからば！ アキナ！ 最終兵器を！」

「わかりました！」

「最終兵器？」

「さつき偶然、近くの古い倉庫で見つけたのよ、覚悟なさい」

ゴオオオ…

「なんだ？」

「ヴェザリー様！ 準備が完了しました！」

アキナが持ってきたのは、なんと戦車だ、それもかなり大型の

「戦車！？ しかもでかい！！」

「ハハハッ！これなら人間ごとき余裕だ！」

「うそ…あれ自衛隊の戦車です！」

「自衛隊って！？高風さんの国の軍隊…じゃなくて防衛組織のか！？」

「はい！」

その見るからに現代的な戦車は第3世代主力戦車である90式戦車だ
なんで近くの倉庫にしまってたかは不明だが

「死ね！」

…

しかしなにもおこらない

タタタッ

「おいお前！それを返せ！」

そいつってきたのは迷彩服を来た男3名だ

「馬鹿な！なんで攻撃できないの！？」

「馬鹿者！お前のような愚か者がいるから弾はすべて外に出して
おいた！」

ドカ！ バキィ！

迷彩服を来た男たちは自分のものと主張するその戦車からアキナを放り投げた

「そんな！？ ヴェザリー様！ どうします！？」

「アキナ！ 逃げるわよ！」

「アンタ達運がいいわね！ しかしいつか春奈をうばい！そして国をぶっ潰して

くれるわ！ ハハハ！！」

そういつてヴェザリー達は逃げた

口では復讐しにくるといつていたがヴェザリー達は

（畜生！二度とこんな国来るか！）

予想外の苦戦に絶望してもう日本にはきたくなさそうであった

「大丈夫ですか？」

「あ、はい」

徹也を心配して3人は来る

「貴方達、何者ですか？ 我が国にはないその戦車は？」

「貴方達は軍人ですか？」

「実は我々、10年前からここにいて、ロマリア人からこれを守り続けてきました、

続く日本になってからも、技術面からこの戦車は理解不能かと思いい、隠し続けてきました」

「我々は、陸上自衛隊北部方面隊第7師団第71戦車連隊第1中隊

所属

の者であります」

「陸上自衛隊…」

北部方面隊とは北海道全域の防衛警備や災害派遣等を担任している
陸上自衛隊の方面隊である

その中の第7師団は千歳市の東千歳駐屯地に置き、
胆振・日高の防衛警備、災害派遣を任務とするほか、
民生協力及び国際貢献活動を行っている自衛隊の師団、
その中の第71戦車連隊は新型の90式戦車を多く配備する

「私はこの戦車の戦車長であります与謝野誠、1等陸尉であります」

「えっと…よくわかりません」

「あ、1等陸尉は軍隊でいうと陸軍大尉に相当します」

「なるほど、理解できた」

「あれは10年前、我々は日米共同で戦闘射撃訓練を行っていた時
であります、

突然なにかに飲み込まれる感じがして、気がついたらここにいた
のです」

「大事な戦車を盗難されるわけにもいきませんので、なんとか今まで
隠しもっていました」

その後、3名の存在を国に知らされるが異世界からきた人によって
建てられた国である為

事実上不法滞在者ではあったものの歓迎された
大日本帝國の技術者は90式戦車に目を向けた
与謝野1尉の説明を熱心に聞いた

90式戦車の破壊力も調べる事にした
こっちの日本の戦車に砲撃することにした
与謝野1尉は一発のみ許可した

90式戦車は100ミリの装甲を持つ一一式重戦車に砲撃を行った

ドウン！

トゴオオ！！

「…恐ろしい威力だ…」

「馬鹿な…一一式の装甲は100ミリだぞ？」

「信じられん…どんな戦車も一撃貫通は無理だったのに」

90式の徹甲弾はあっさり貫通した

一一式重戦車の車体はティーガーである、所詮は第二次世界大戦の
代物だ

そもそもまだ大日本帝國は朝鮮戦争レベルまで技術が達していない
さらに陸上兵器は同世代の地球と比べても劣っていた

そんな国の技術者が第3世代主力戦車である90式戦車の破壊力を
目にしたら

驚くのも無理はない

新たに自衛官・与謝野1尉らが仲間になったが90式戦車が戦場で
でることはまずないだろうと
思われる

しかし彼らの戦車のおかげである意味ヴェザリー達は撤退したのか
もしれない

26 燃え尽きろ！！熱戦・烈戦・超激戦（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

…ってタイトル、これなんでドラ ンボール？

いきなり番外編 / 日本の戦車事情

5月11日

帝都東京、某製作所 -

ガチャッ

「お、きましたか」

「もう、ご要望の戦車は既に量産タイプもあわせて23両が完成しましたよ」

「そうか」

石原陸軍省大臣が自ら見に来たその戦車とは軽戦車である

すでに時代遅れのように聞こえるが実はこのロマリア（現日本）半島の地形に

適するタイプの戦車なのであった

地球と違い地盤が悪い地域が多い

特にガリア国境付近はひどく重武装中戦車や重戦車では突破は難しい

ここを突破できるのは旧式の今チハと九五式みである

しかしチハは最高速度38キロと鈍足である為装甲を犠牲にある程度の対戦車戦能力と

速度を誇りチハの援護が可能な軽戦車の開発が急務であった

また、国内も荒地が多いため楽に重い戦車を運用できない

現在の日本の主な戦車：

九五式軽戦車：

八式中戦車がこれを置き換える予定だったが悪路に弱いという欠点があった

そこで今後もしばらく対ソ戦を意識して悪路に強くそこそ速いこの軽戦車が使われ続けることになった

九七式中戦車：（改も含む）：

改造され戦車砲の威力も上がり速度も48キロまであがったタイプも量産されたが数が少ない

しかも装甲は改造前のタイプと改造後のタイプ、どちらも25ミリのままである

しかしほかの戦車に問題があるため現在も主力戦車として使用されている

八式中戦車：

速度も速く丈夫で火力も高い、

九五式を置き換える予定であったが足回りの構造上悪路に弱い事がわかった

しかし旧来の戦車は非力である為、また、ガリアなどのまだ戦車を製造する技術が

未熟である国へ九五式などの旧型の一部をあげる必要があった
その為数十両が配備された

M4中戦車：

総合性能は優れているものの日本人には使いづらいと評判で
あまり生産はされず

ティーガー1&一一式重戦車：

火力、防御力などのあらゆる面で優れている

しかし重くて整備性に問題がありまた機動性も低く

大陸で戦闘を行う場合はガリアとの国境を越えられない為船で輸送するしかない、

しかしクレーンの性能は八式を持ち上げるのが精一杯である

生産数は非常に少ない

こうしたことから新型戦車を開発する必要があった

そこで陸軍は装甲を犠牲にして速くてそこそこの火力を備える軽戦車と

チハよりも丈夫で攻撃力の高い中戦車の開発を命じた

まずは軽戦車が13両量産され中戦車も量産型10両が完成した

「これが…軽戦車ですか」

「はい、一一式軽戦車です、それに今年はすごいですね、中戦車もあるんですから、

三種類そろいますね」

一一式軽戦車

貫通力に長けた九式47耗戦車砲を採用、最高速度はケンペル中佐が開発した

高性能ディーゼルエンジンのおかげで56キロまでになった

最大装甲は、かつて陸軍の人間が言っていた最低でも装甲は30ミリくらいほしいと

言っていた、九五式の教訓、またエンジンの高性能化から装甲を35ミリまで

厚くする事に成功した

しかも重量を15t以下におさめる事ができた、装甲はソ連に習って傾斜装甲を採用、チハよりも10ミリも厚い35ミリだが

傾斜装甲により元の装甲厚よりも丈夫である

一式中戦車

この車両はチハの後継車として開発された
同じく高性能ディーゼルエンジンを搭載、最高速度は47キロ、正面装甲を50ミリまで厚くした、側面装甲もチハレベルにすることに成功、

総合的な強度はチハや九五式よりも上昇した

主砲は九式47ミリ戦車砲、

貫通力は1000メートルで50ミリの装甲を貫通できる、第二次世界大戦時代に

もっていつてもたいした威力ではないがハルケギニアでは恐ろしい破壊力を持つ事になる

しかし傾斜装甲を採用していない、保守的な設計の為、一一式軽戦車とほぼ同レベルの

強度でしかない、銃には貫かれる心配はないが相手がソ連やエルフが使っている

T-34などの戦車の場合はとても戦えはしないだろうがこれまでの戦車に比べると

総合的に優れている

ちなみに、スペックが一式中戦車に似ているのは日本軍が持っていた一式中戦車の設計図を参考に造られたからである

一式よりも速度が多少速いがその他はほとんど一式である
実質一式のパクリでは戦車開発が急務だった日本にとってはしょうがない事である

重量は17.5 t、

テストの結果、この二種は採用される事が決定した
国内の全戦車生産工場の総力をあげて来月までに軽戦車を23両、
中戦車を28両製造する事だ

一方空軍基地 -

「ねむい」

「どうしたんですか草加さん？」

「いや、戦車の事はよくわからんからさ」

「そうですか、でもなんでうちの国の戦車はこんなに弱いんでしょうね？」

「お父さんは日本の戦車は強いって言ってましたけど」

多分、春奈の父のいう日本の戦車は90式とか自衛隊の主力戦車だろう

しかし旧軍の戦車はほかの列強のものと比べれば非力とばかりしかいいようがなかった

なぜ、日本の戦車が弱いのか、
それは軍がハルケギニアに来る前からすでにわかっている事だった

まず、日本は島国である、島国であり資源もあまりない、

海軍と飛行機を重視した日本は大型装甲車両を含む陸戦兵器の開発及び生産の

優先順位を下げた

しかしこれはあとにその重大さを痛感する事になる

ノモンハンでは比較的装甲の薄い昔のソ連戦車が相手だったため、戦う事ができた

大東亜戦争に入っても戦車や有効な対戦車兵器の少なかった東洋のイギリス陸軍

を相手にマレー作戦等では活躍できた、しかしM3軽戦車が相手になれば

太刀打ちすることができなかった、陸軍はノモンハンの時点で戦車の重要性をある程度

認識していたもののまだまともな戦車は開発されていなかった

ようやくチハ改が登場しても今度はM4シャーマンが出てきてまた太刀打ちできなかった

結局、本格的な戦車が揃った頃にはもう戦局が絶望的でそれらの戦車は本土決戦用に温存

されていた、その為、一度も戦う事はなく、その本当の能力は不明のままである

ハルケギニアにきた日本軍は先の大戦でトリストイン軍のM3軽戦車に苦戦を

強いられたりゲルマニア軍の3号戦車や4号戦車に苦戦を強いられたりしたが

それも局地的な事でほとんどの相手は歩兵であり地球の戦争とは比べ物にならないほど

活躍できた、いくら貧弱で相手の戦車のほうがよくても数のおかげである、

それにハルケギニアはつい最近まで中世レベルの生活を送っていた、
いまでもそんな地域はある

戦車なんて相手にする力があるはずもない、

前のペトログリード事件でもT-34以外は歩兵とBT-戦車程度
しかなかった為、抵抗できた

もう一つは20tの重さに耐えられる橋が少なかったこと、18t
以上の戦車をのつけれる
船があまりなかったこと、クレーンの性能の限界、陸軍の思想、自
動車産業の遅れも
影響した

しかしそんな戦車で先人達は国の為に戦ってくれた
感謝しなければならない

ちなみに最近、ガリア軍は戦車よりも騎兵に力をいれている
まだガリアの技術では十分な防御力を備え十分な速度を誇り十分な
火力がある戦車を
大量生産することは難しいのである

また橋もない、

その為、安価で汎用性の高い騎兵を重要視するようになった
実際兵士達も戦車より馬がほしいらしい

いきなり番外編 / 日本の戦車事情（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

ちなみに日本軍の戦車があまり強くなかったのは実話です
でもそんな戦車で戦ってくれた先人達に感謝です

27 兵器を探せ

90式戦車がどこにてもあれそうな倉庫にありしかも地球からきた陸上自衛隊の自衛官3名が出てきたことにより陸軍省はまだそこらに兵器が転がっていると目をつけた

ご都合主義ではあるが、彼らの必死な搜索を見てもらいたい

5月18日 -

独立搜索部隊が組織された

これは国内中に転がっているこの国の軍のものではない兵器を探す特殊部隊だ

部隊長にはかつてアルビオン突進作戦を指揮し名将として語られた昔石原の参謀であり情報将校である平岸中将が任命された

「我が国のあちらこちらには、ロマリアが集めていた、また偶然迷い込んで

そのまんまだったという兵器があることが、数日前の自衛官騒動で発覚した」

「そこで、それらの武器を回収すべく我が部隊が設立された」

「きつとまだ、兵器が眠っているはずだ、

皆、がんばって兵器を集めてほしい」

この日より、熱心な搜索が始まった

しかしこの日はなにも見つからなかった

だが翌日、中野小隊があるものを発見した

タツタツタツ…

「ん？」

怪しげな倉庫があった

ハーケンクロイツがさげてあり入り口丈夫には地球のヒトラーの写真が飾ってあった

中野少尉は地球の日本人である為
ヒトラーの顔を知っていた

「これは、ハーケンクロイツにヒトラー」

「怪しい臭いがするな」

「潜入しますか？」

「まで、不法入居はいかん、許可をとろう」

「いえ、誰もいません」

「よし、あける」

「鍵が」

「誰もいないのであれば壊しても問題ないはずだ」

中野小隊の隊員は扉をぶつ壊した
そして中に入ると航空機があった

「こ…これは？」

「色からしてドイツ軍の飛行機です、しかもこの感じは…急降下爆撃機ですね」

「急降下爆撃機だと？」

急降下爆撃機、大戦間、第二次世界大戦頃に流行った航空機の種類の一つ、

急降下爆撃を行え特にドイツ軍での活躍は華々しいものだった

この機体はユンカースju87、愛称はStuka^{シュトゥーカ} 日本語スツーカー
ドイツ軍の急降下爆撃機で第二次大戦の初期のドイツ軍の快進撃を
助けた航空機の一つである

しかし急降下爆撃機は時代が進むにつれ活躍の場を失っていった
ju87もその一つだ

倉庫にはドイツ軍の写真と机にドイツ語で刻まれた言葉があった
内容は「ハンス・ウルリッヒ・ルーデル、異界二眠ル」というもの
だった

どうやらこのスツーカーは戦車撃破王ことルーデルのスツーカーらしい

その頃別の部隊でも兵器というか武器を見つけたができた

古来よりこの地に住む日本風の華族の家があった

彼は織田氏というらしい、家紋も織田家のものだった

なんでも本能寺で死んだのではなくハルケギニアに召喚されたとい
う話らしい

その後、ロマリアの大貴族として代々生活したきたそうだ

現在は織田中延という50代の男が家主である

実は地球にある宗三左文字は偽者で本物は信長がこつちの世界に持
っていったそうだ

その為本物の名刀「宗三左文字」がある

「なるほど！ アンタも別世界から来たのかい！」

「見たところ我と同じような顔をしているな！」

「時代は違えど、国は同じですから」

「そうか！ では貴方達は未来の武士なのですね！」

「そうです…ね」

「ハハハ、直接ほかの武士と話ができてうれしい、
もし国が有事であれば私にもうしてください！」

このあたりには1万近い私の兵士がおりますので」

宗三左文字は入手できなかったが信長の子孫と会合することができ
いざとなったら戦ってくれるとまで言ってくれた

ガリア国境付近にある湖には前々から城が2つ浮かんでいると噂を
聞いたので

そこへは三島小隊が向かった、

そこにはあの東郷元帥らが座乗した戦艦三笠が

その隣にはビスマルクにあっさり撃沈されたイギリスの巡洋戦艦フ
ツドがあった

これらは20日までに集められたが最近地中海（日本名）情勢が怪
しくなってきたためこの活動は

中止された、エルフがエチオピア（アフリカ）大陸にもいる事は以前の調査で
発覚しているが今月に入ってカルタゴ付近にエルフは13個師団を
配置したとの情報が入った
地中海情勢が動き始めた

27 兵器を探せ（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております
しかしこれなんて都合主義？

28 ゆれる地中海情勢

5月22日、潜水艦によるとさらに3個師団が送られエルフ軍は16個師団を

カルタゴに配備した、

これを受け、日本はシチリア島を要塞化することに決めた

5月25日、陸軍、15000、海軍10000人が集結、現地の海軍7000、空軍1200人とあわせて33200人が集結した

この中には一一式軽戦車や一一式中戦車、計30両があつた
そのほか海軍は戦艦二隻、重巡洋艦三隻 軽巡洋艦一隻、駆逐艦一隻と

九六式陸攻、一式陸攻、閃光、神山、蒼星計350機を
空軍は現存の50機から73機を送る事になった

内地にはまだ1500機以上の航空機がある
3年間で本土と大和帝國、満州国の工場で大量に造られた

さらに28日、先鋭部隊である厚木の第1空軍の一部戦力が
送られる事が決定した

厚木空軍基地 -

「なに準備してるんですか？」

「高皿さん、俺はシチリアに転属になった」

「えっ？」

「エルフがカルタゴに戦力を集中し始めたのは知ってるよな？」

「はい」

「もし攻めてきたとき戦う為らしい」

「えっ？つてことは」

「最後になるかもしれないな」

「…そうですか…」

「あの！私も零戦なら操縦できます！」

「だが高風さん、そういうわけにはいかない」

「でも…助けてもらった恩返ししたいです」

「このままここにいても失礼な気がしましたし」

「だが…」

春奈は戦いになった時助けてくれた恩返しをしたいらしい
断ってもしつこいので危険を承知したうえで隊長に頼んだ

案の定隊長は許可をくれた、翌日筆記試験を行ったが前日の徹也の
おかげで

高得点を獲得、体力的にも空中戦を行いつつここまでこれたので問
題なしとされ

いきなり少尉、士官として空軍にはいった

流石はクラスの委員長？その天才ぶりは皆評価した

おまけ：現時点で日本軍の総戦力

3年間、軍部は他国からの警告をききエルフと戦争になった場合の
為に極秘で軍拡を
おこなっていた、その為人間の国ではハルケギニア一番の軍事力を
持つ

しかし海軍の艦艇のほとんどは大和帝國のものであったり
武器の数のわりに兵員がたりなかったりする部隊もある

陸軍・人員30万（武器は余るほどある）

戦車装甲車1200両

火砲4900門

揚陸艦10隻（ほとんど大和製）

観測機40機（大和製オートジャイロ）

山岳や島、荒地での戦いに強いが砂漠や広い平地での戦いはあまり
得意ではないらしい

局地戦では最強の軍隊である

海軍・人員24万

（ただし艦艇の半分以上は大和帝國製、）

航空母艦

主力空母6隻、さらに二隻建造開始

軽空母12隻

戦艦28隻、内大和型、長門型、金剛型2隻建造中

重巡洋艦30隻
軽巡洋艦43隻
駆逐艦58隻
潜水艦20隻
水雷艇8隻
航空機758機

多くの艦艇と多くの航空機を持ち大和帝國と並び二大海軍である
空母を最重視しすでに主力空母は6隻、新たに2隻を造ることにな
っている

空軍・人員5万
航空機・865機
軽空母2隻建造中

数多くの航空機をもちハルケニア最強の空軍と思われる
ベテランのパイロットが多い

計59万人

日本人口約860万人（大和帝國、満州国、中華帝国移住者多し）

28 ゆれる地中海情勢（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております
いよいよ東西がさらに緊張してきましたね

29 首脳会談

5月28日、厚木より一部戦力がシチリアへ向かった
徹也と春奈もそのうちである

しかしこれは開戦を決定するものではない
あくまでエルフ軍が攻めてきた場合本土侵攻を防ぐための戦力をシ
チリアに送っただけである

エルフから本土を守る皆はシチリアしかないのである

翌29日、各国の首脳会談がガリアのリユティスで行われた
しかしアンリエッタやメリケン大統領は参加しなかった

「最近トリステインが不穏なのです」

ガリア国王、シャンタルが言う

「…といいますと？」

「やはまずかったのでしょうか、彼女にトリステインを任せたのは」

「…否定はできません、戦争を仕掛けた第一人者でありますからな」

「しかし、あの時断つていればメリケンと戦争になっていた」

「メリケンは強い、兵器の性能は我々に劣りますがなにしろ数がお
おい、弾が足りない

メリケンは北の大陸と南の大陸を制する国家です」

「物量は半端ではないでしょうし、それにそれだけ戦場が広大にな
ると補給の面でも

厳しいことになるでしょう」

「確かに、補給をさえぎられれば前線の部隊は武器も食糧も届きませんね」

「さらに敵の本土ということもあつて半端ではない数の軍が来る、苦戦するでしょうね」

「しかし、今はトリステインとメリケンは関係ありません」

「もしもの時こそ極秘で作ったトリステイン撃滅機密条約を発動させればよいです」

「そうですね」

「それよりも、エルフ勢力だわね」

キウルケはエルフを最も警戒している、ソ連も隣だしエルフも隣である

しかも以前の戦いでゲルマニアは戦力の大半を失っている

「最近、エチオピア大陸のカルタゴに多くの軍を配備したって話ですよね」

「はい、それにつきましては、我が国は大変、警戒しております」

「侵攻してきた場合、エルフ軍はまず我が国のシチリア島に上陸してくるでしょう」

「それで？」

「我が国はシチリアに軍を送り総勢3万3千が今、シチリアにいます」

「要塞化すれば、エルフ軍も恐れをなして退却することでしょう」
「ただし…必ず撤退するとは限りませんが」

北朝鮮なら撤退するだろう、韓国軍が北に展開したらすぐ退却したりする軍隊であるから

しかし、エルフは人間より強いと思っている、実際の力関係も人間より強い

はたして、3万程度の兵士が島にあつまっただけで撤退するかどうかは疑問である

「…撤退してくれるといいですね」

「しかし…もし侵攻してきた場合はどうされるのですか？」

「戦争は避けたい、しかし、なにも抵抗せず国を滅ぼしては私は国家の首相として、

失格であります」

「戦わざるを得ないでしょう」

「妥当な見解ですが、勝ち目は？」

「連合艦隊長官であります、木下元帥の言葉どおりでありましたら、海軍は始めの半年から一年くらいまでは優位に戦える、しかし2年3年となつては

保障はできない、との事だそうです」

「陸軍も、最初の1年くらいなら、思う存分暴れられるようです」

日本の国力では1年が精一杯、2年3年ともなれば保障はできない

「私は、もし開戦になった場合、目指すは勝利ではなく、講和だと思います」

「やとしすれば早期講和、それしかハルケギニア西部が残る方法はありません」

技術で勝つても、戦術や歩兵1人の戦力で人間はエルフに劣る
消耗戦にもなればまちがいなく勝てない、
もし戦争するとすれば、早くに敵を倒し、早くに講和をするのみである

しかし、この作戦も失敗に終われば第二次世界大戦のようになる
山本長官もこういう考えほもっていたがその思惑は見事にはずれ、
2年3年と戦争は長期化、
結局国力のない日本は敗北した

今回味方が多いとはいえそれでも物に限りはある、戦争になった場合はたしてエルフ軍、ソ連軍、中国軍を倒せるだろうか？

そして、表向きは仲良しのメリケン、しかしメリケンは敵か味方か？

29 首脳会談（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております、
半年〜1年つていうのは山本五十六の言葉が元ネタです

30 シチリア島防衛計画

5月30日、ハルケギニア首脳会談が行われた翌日

日本政府は5月の末よりエルフ軍との開戦を避けるよう努力していたしかしカルタゴにはすでにエルフ軍20個師団が確認されている誰の目にも開戦は見えていた

その頃、シチリア島守備隊の総司令官はアルビオン突進作戦を指揮し名将として語られた

昔石原の参謀であり情報将校である平岸中将が任に就いた彼は南部の防衛に当たる南部兵団の兵団長として

当然司令部があるタラント（日本名、三沢）に居るべきであつた

しかし彼はここを占領し

本土上陸の足場にしようとするのがエルフの作戦であると睨み自らシチリア島で陣頭指揮を取ることにしたのである。

「島の面積は？」

「25、710 km²です」

「広いな、しかし兵力を分散させるわけにもいかない、我が軍には余裕が

ないのだからな」

「そうですね…」

平岸中将は島を視察した後、陸海空軍総司令部があるパレルモへと

移動した

パレルモには陸軍は少数だが海軍は軍港があり艦隊の主力基地である、また

海軍航空隊の中でも先鋭として知られる戦闘289、299、309、319飛行隊が、

空軍は地元警備に当たっていた第8航空師団と、第1空軍の一部戦力が駐屯している

マザーラ・デル・ヴァッロには島内最大規模の対空砲陣地と第1監視所が存在する

またエルフ軍は上陸してくるなら絶対ここであると睨み、多くの陸軍が駐屯する

シチリア島防衛は本土決戦を避けるために重要な戦いである

ここが陥ちたら日本は終わりだと開戦前からそれは予測されている

日本軍にとって唯一の頼みの綱は本土にかなり近い事である、輸送は楽だ

兵員が足りなくなったら本土から楽に連れてこれる

しかし数があっても戦いには勝てない

平岸中將は有利に戦うための作戦をまだ宣戦布告もされていないがもしもの為に考えた

シチリア島守備隊総司令部

5月31日、ここで最高作戦会議が行われた

「諸君らが駆けつけてくれたのは本当守備隊の総司令官として、また南部兵団長として、大変うれしいものです」

「まだ、戦争は始まっていないのだが、皆の目からもわかる通り、

開戦は

避けられぬ状況にある」

「まず敵は本島を狙って上陸してくるはずでしょう」

「うむ、それは否定できません」

「そこで、我が軍は島にあるありったけの地下陣地や塹壕を最大限利用して戦う、

敵軍はおそらくそういった戦いにはなれてないだろうと私は思う」

「なるほど、平地での戦いに向いているエルフ軍を撃退するのにはこれ以上のものがないですな」

「それから、以前ゲルマニアがやったような万歳突撃は絶対にしないでくれ」

「万歳突撃は勝てる戦いをも敗北へ導く作戦である、絶対にしないでくれ」

「最後の命令は私が下す」

「お言葉に従ってやりましょう」

一方シチリア島には謎の武士の集団が上陸した

そう、織田氏だ、先祖が信長で華族であり織田氏の頭領である中延は領地の人間、1万の大軍を率いてシチリア島にやってきた

「我々も！義勇軍として戦わせて下さらないか？」

「…なんだこの侍集団？」

平岸中將は困った

とりあえず中延を知る軍人は説明した

「織田信長の子孫の織田中延っていう華族の者です、
自称武将でご覧の通り大軍を率いてます」

「我々は武器は貧弱ですが！士気はあります！必ずや戦争を勝利へ
導きます！」

武士道に燃える織田家の人々は引き下がらない

「うむ、いいですよ、しかしまだ、戦争は始まっていないので、戦
闘開始の令が
出してから行動してください」

「わかりました」

平岸は不安だ、刀と火縄銃しか持たないこの武士の集団がはたして
役にたつのかと、
そう不安げな顔をしている平岸に中延は語った

「心配いりません、我が軍には優秀な人材が揃っております」

「は…？」

「まず私、織田中延、名將信長の直接の子孫であります！」
「そしてこちらが…」

「クリスティナ・ヴァーサ・リクセル・オクセンシエルナだ、
長いのでクリスでいい」

「ちょ！私のセリフを！」

「…とりあえず、彼女はどこかの国のお姫様らしいが、恩師が日本人らしく」

我々に出会って感激してそれでかくしかじか我々の仲間になったのです」

「は…あ…」

こうしてシチリア島には正規軍3万3千、義勇軍1万人が揃った中でも義勇軍のクリスは島にいる歩兵中最強の存在であろう

二つ名は「迅雷」、風系統の魔法を得意とする彼女はほかにもほかの織田家の人間や領地の人間にはできない業をもっていた。

織田氏が60年前に手に入れたという家宝「疾風之丸」はやてのまるを自由自在に操れる

「…っで疾風之丸ってなんですか？」

「はい、クリスだけが操れる鉄の飛行物体であります、我が家の家宝です」

「それをみせてくれませんか？」

「いいですよ、もうもってきましたから」

「クリス、あれを見せてもよいな？」

「はい」

平岸らが見せられたものは深緑の胴体と羽、また羽と胴体には日の丸が

平岸らは知らないがこれは四式戦闘機「疾風」、日本最優秀戦闘機と言われた陸軍の戦闘機である。

「これ…飛行機じゃないですか？」

「いえ！疾風之丸です！」

「…ダメだこりゃ」

「さあ、今夜は宴といきましょうか、戦う前は酒を飲もう」

平岸らと数名の将校は本当に中延の提案した宴に参加し酒を飲んだその頃、首相

「…」

「きましたか、電報が」

「はい、この文章はまちがいなく…宣戦布告です」

「そうですか、各部隊に戦闘準備をさせなければいけませんね」

5月31日、日本はエルフより宣戦布告を受けた

30 シチリア島防衛計画（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

31 シチリア島の戦い 1

織田氏一味は空軍基地の近くの施設に寝泊りした

6月1朝 空軍基地

ブン！ ブン！

徹也は木刀で素振りしていた
徹也は幼い頃剣道をやっていた

「ふう、しかし、宣戦布告されたとは本当か？」

「わからないですよ」

春奈が知ってるわけない

「ほう、さすが日本の軍人だ、武士道精神はあるようだな」

「ん？」

そこにいたのは金髪の少女、クリスだ

「誰？」

「名前はクリスティナ・ヴァーサ・リクセル・オクセンシエルナッ
ていうんだ」

「長っ！」

「ならばクリスでいい、皆そう呼ぶ」

「どこかで見たことがある風格ですね」

「左様、私は侍だ」

彼女が言うに師匠は侍らしい、あとアンリエッタとは昔からの仲良しだったが

かつての戦争でトリステイン崩壊前に逃亡中、中延と出会ったらしい

- - 回想 - - - - -

タッタッタツ…

「!?!?!」

シヤアッ!

気配を感じ中延は宗三左文字を抜く

カァン!

5年前ぐらいの織田中延

「何者ぞ、貴様」

「中々の腕だ」

「気配を消していたつもりだったが」

「そなたもな、相当の達人と見た」

タッタッタツ…

…

「今のは見事だ、ほとんど気配がなかったぞ」
カシッ

「何故剣を入れた？」

「そなたには戦意がないと見た」

「よくわかったな、でも男なら白刃どりをしな」

カシッ

クリスも剣をいれた

「我の癖である」

「ところで貴女は日本人か？」

「いや、私は日本人ではない」

「私の師匠が日本人だった、アンタは？」

「先祖が武将だった」

「名はなんと申す？」

「織田…中延だ」

「織田：もしかすると信長の子孫か？」

「そうだ、最も日本人の地は8分の1程度しかながれてないので
生粋の日本人とはいえないがな」

「よくそんなに日本人の血が流れているな」

「がんばって日本からきてしまった女性とばかり、我が家は代々結
婚してきた」

「なるほど、本物の侍に会えてうれしいぞ」

――現実――

「…というわけで今は中延殿の家に住んでいる」

「草加さん、仲間ですね」

「武士道ですよ武士道」

「それは高風さんじゃない？俺は大和帝國出身者だぞ？
似たようなものだけど」

「さて、どうやらエルフの奴らが宣戦布告をしてきたらしいな」
「お主達も不幸だな、敵との最前線が国内だとは」

「まったくです、しかも本土に近いという」

「まあ補給の面ではこまらんな」

「それに、堅固な陣地がいくつもあっていうからな」

「とりあえず私はこれで、いつ来るかわからぬ出撃命令を待たねばならないので」

「おう、侍の男女、元気でな」

タッタッタツ…

「なんか、私まで侍にされてますね」

「高風さん、彼女のイメージにぴったりなんじゃない？ 純粹な日本人だし」

「そうですか？」

1日、7時、数十隻の軍艦がマザーラ・デル・ヴァッロ沖に集結、艦砲射撃を開始した

その中にはロシア帝国海軍第1戦艦隊の旗艦、クニャージ・スヴォーロフの姿もあった

ドオン！

ドオン！

「敵は随分わかっていているみたいだな、…というかあの船、国親父すわろうじゃないか？」

「ほんとだ！ 俺の父さんが日露戦争で沈めた船だ！」

国親父すわろう、クニャージ・スヴォーロフの事を日本はこう呼んだ

隼にはオスカー、疾風にはフランクなどのようにコードネームの日本版だろう

「しかし、宣戦布告をつけたのになんで先制攻撃をさせないのでしょう？」

平岸中將は敵軍が上陸するまで大規模攻撃をかけてはならんと命令した

この命令に、反対の声をあげる者が多かった

「戦争はちよつとの失敗で勝敗が決まるんだ！

先制攻撃をしないで戦いを不利にまっていこうとする日本軍は馬鹿か！？」

先制攻撃を行わないのは日本軍にある思惑があつた

一日、夜 -

「司令官殿！何故先制攻撃を行わなかったのですか！？あれほど事前に作戦は立て敵の姿も見えていたというのに！」

「私にはある考えがあります、それがなければただの馬鹿です」

「私の考えは、国民を目覚めさせる事です」

「国民を？」

「人間、できれば戦争はしたくない、今の国民はやれといわれても実力の半分も出せないだろう」

「アメリカもそうだった、真珠湾がやられるまでやる気がなかった」

「しかし、やられた後はどうだ？あれほどのスピードで大日本帝國

を敗北に追い込んだ」

「攻撃されるとは、損害もでるが、逆に国民の戦意を高揚させる効果もあるのだ」

「なるほど」

「敵が上陸するまで、海軍航空隊と空軍以外の活躍は、制限する」
「おそらく上陸は3日後だ、その日まで耐えろ、国民は目覚める、そして日本の真の実力が試されるのだ」

その後、エルフ軍は攻撃機で海岸部の攻撃を開始した

ヒューン！

ドゴォォン！！

ダダダダ…

「撃て！とにかく撃てば一機必ずおちる！」

ドン！

ドン！

必死に日本軍は対空砲を放った

また海軍航空隊と空軍の戦闘機も迎撃にいった

ダダダ…

しかしエルフ軍の航空機は地球のソ連製、航続距離が短い為、あま

り大規模な攻撃は

行われなかったものの艦砲射撃などで500名の日本軍が亡くなった

国民は次第にエルフに怒りを覚えた、

戦闘の様子はテレビで報道された、自国の兵士が殺されてゆくのを
見れば

皆、怒るだろう

平岸の思惑はあたりかけていた

そして3日後、

「揚陸艦数隻がこちらへ！」

「今度は自身をつけさせる為にも、本土を守る最後の砦を守る為にも、

全力で戦え、玉碎は許さない」

「はっ！」

4日、朝、多くの上陸用舟艇がマザー・デル・ヴァッロへやって
きた

この姿は昨晚から見えた、

兵士の数は揚陸艦の数から見積もって5万とでた、こっちは3万、
これまでこちらのほうが少ない、または同じ数でエルフに勝った例
はない

これまでの常識から考えれば日本軍には勝ち目はない

この知らせはすぐにテレビで報道され朝、他国にも伝えられた
皆、日本は負けたと思った

使用兵器よりも魔法が恐ろしいエルフ、今や人間最強といわれる日
本軍

戦いの時は迫っていた

3 1 シチリア島の戦い 1 (後書き)

皆様方のご感想お待ちしております

32 シチリア島の戦い 2

6月4日7時頃、多数の上陸用舟艇が襲来、いよいよ本土を守る為の決戦が始まるうとしていた

作戦名は「守号作戦」、文字通り守れという事である

マザーラ・デル・ヴァッロ、元々は町であつた、しかし工兵隊の活躍で27日より工事、

1日には浜辺にちよつとした丘が造られそこには多くの軍がいた艦砲射撃のおかげですこし地形が複雑になり行動しずらくなつたが逆に敵が突破しずらくなつた

ここだけでも1000名の陸軍が守っていた丘には多くの装備がある

現在、大手陸上兵器生産会社として濱田、蔵口、原糊などの製作所がある

そのうちの蔵口製、一一式二五糎噴進砲があつた

一一式二五糎噴進砲とはいわゆるロケット砲である構造が簡単で生産性にも優れている

テストの結果戦車すらも破壊できる恐ろしい威力を持っており、対エルフ戦では

大いに役立つだろうと期待されている
ただし欠点は発射までに時間がかかる事である

また本当にトリスティンが嫌になって亡命してきた偉大なるコルベール先生が二年前に

開発した空対空ミサイル「空飛ぶ蛇くん（日本名、九式誘導噴進弾）」を

地対地ミサイルに改造したタイプの「陸から蛇くん（日本名、一式誘導噴進弾）」が

配備された、魔力追尾機能のおかげで非常に命中率の高いミサイルになった

こちらも威力が高く歩兵はまろん竜やガーゴイルも倒せる

戦車は正面装甲こそムリだが後方や上部など装甲の薄い部分に命中すれば撃破可能である

こちらは発射には時間をかけずにすむが生産性に欠けていた

コルベールは陸上兵器を得意としない為空対空ミサイルのように大量生産が不可能であった

もちろん、空飛ぶ蛇くんも実戦部隊に配備されている

空軍なんかには戦闘機の両翼の下にぶら下げている機体がある
その大部分はシチリアにある

主に零式戦と隼に装備された

零式戦は20ミリ機銃の弾が少ない為、隼は武装が貧弱すぎるためである

7時18分、上陸を開始した

ガタツ…

ガアア…

タッタッタッタッ…

多くの兵士や戦車、装甲車などが上陸してきた、しかし日本軍は攻撃しない

水際作戦をとったサイパン島守備隊はあっさり敗れた、水際作戦の効果はあまりないと

考えた平岸は硫黄島の守りを参考にした

敵を上陸させてから叩き潰すのだ

兵士が歩く音、戦車が動く音、風の音、草の音、鳥の鳴き声しか聞こえない

そして、エルフ軍が浜の半分まで上陸してきた頃、自ら前線に立ち戦う事にした

平岸中将は自ら、攻撃開始の令を下した

「攻撃開始」

平岸に続いて参謀も攻撃開始の命令を下した

「攻撃開始！」

「撃ち方始め！」

ガチャッ…

ドン！

ドン！

ドン！

まず噴進砲を一斉に放った

ドゴオオン！！

ドガアア！！

戦果は日本軍の予想以上だった、エルフ軍はどこから飛んできたかわからない砲弾に
たちまちやられるのだった

続いて砲兵が大砲を放ちまくる

ドン！

ドン！

さらに、陸から蛇くんを一斉に発射した

ゴオオオオオ...

「うわああ！！！」

「ぐあ！！！」

「気をつける！敵軍はわけのわからない武器を使っぞ！」

「進め！敵陣まで乗り込めば反撃はできるぞ！」

「野蛮で弱い人間など！我々の敵ではないのだぞ！」

ドン！

「よし！戦車を前衛へ！」

ガアアア…

ドン！

ドガアアア！！

日本軍陣地 -

「やったあ！戦車を撃破したぞ！」

「いいぞ！よし電報を送れ！」

「わかりました！」

「噴進砲八最強ナリ、我、戦車ヲ撃破セリ」

一方、エルフの揚陸艦

「閣下！敵の反撃が始まったようです」

「それで？」

「損害が大きい、さらなる援軍が必要と思われます」

「そうか、シチリア島を攻略しなければ日本に攻め込む事はふかの…」

ドゴオオオ！！

「なんだ！？」

「閣下！ 左舷になにかが命中したようです！」

そう、伊六 一潜水艦が到着、破壊攻撃を開始した
爆雷を持たないエルフ軍は魔法で対抗するしかなかったが
肝心の魔法が潜水艦にはきかない

それどころかエルフは潜水艦を発見できなかった

さらに

「閣下！ 敵の飛行機がこちらに來ます！」

「なんだと！？」

エルフ艦隊の所に海軍航空隊が駆けつけた、

隊長機は楠目中佐（昇進した）だ

「急降下！」

ドゴオオー！

「よし！」

「ツハハハ！中佐やりましたね！」

「どうだ！寝る間も惜しんで訓練した成果は！」

数十分後 -

「国親父すわろう撃沈！」

「ツハハハハ」

マザーラ・デル・ヴァツロ、浜 -

トトトトト...

夕方までにエルフ軍5000名を撃退した

しかしエルフ26名が陣地へ突撃してきた

ダダダ...

「うわああー！」

「砲兵隊！一時退避！歩兵隊出撃！」

ダダダ…

バババ…

26名のエネフ兵士と激しい銃撃戦を繰り広げた、10分後、全員を撃退するも

日本軍は53名戦死した

エルフ軍の優れた魔法は機械化歩兵にも有効であった

32 シチリア島の戦い 2（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

33 シチリア島の戦い 3

タタタッ！

「司令官殿！ そろそろ弾薬が尽きそうです！」

「予想通り、いやそれ以上の強さだよ、エルフは」

「まあ元々、ここは突破されると予想していた」

「…ということとは？」

「勝敗は、ここより10キロ後ろの鉄鋼要塞で決まる」

鉄鋼要塞とは浜より10キロ後ろにある日本軍シチリア守備隊の大要塞である

陸軍6000名が守っておりそこに浜で生き残った538名が合流、さらにすぐ近くにも3000の兵士がいる

6月5日6時、エルフ軍は鉄鋼要塞へと進撃した

「はっ！ 司令官殿！ どうですか？」

「生存は538名、半分が生き残った」

「そうですか」

「すくなくともここは、陥落させるのは難しいでしょう、近くには海軍航空隊の基地もあります」

本日までにエルフ軍は5万の兵士をシチリアへ上陸させた

しかし、補給線が遮断されているのは気がつかなかった
対潜能力が0に等しいエルフ軍の艦艇は次々と潜水艦に撃沈されて
いった

これにより、輸送が難しくなり前線部隊へ物が送れない状態になり
つつあった

一方の日本軍は本土も近く制海権も確保しているため、極めて安全
な輸送が行えた

8時、警戒しながら進軍したエルフ軍は鉄鋼要塞までたどり着いたが
日本軍の大反撃を食らった

ダダダダダ…

「うわあああ！！！」

「どうですか？」

「物資から考えて勝利しつつげればすくなくとも一ヶ月は持ちこた
えるだろう」

「というよりここで勝たなければシチリアは陥ちたも同然だ」

9時、エルフ軍は攻勢をかけた
しかしそれも失敗に終わる

この日より2日間、攻勢をかけては失敗しが続きエルフ軍はこの鉄
鋼要塞を

「難攻不落の大要塞」と恐れた

一方日本軍も反撃の準備が始まっていた
海軍の活躍でエルフの増援部隊がこない、輸送船もほとんどが到着
できない

かといって大型の航空機はもっていない、魔法で運ぶにも限度がある
満足な補給ができないエルフ軍と消耗戦にもちこんだ日本軍はエル
フ軍の物資が

枯渴した所を包囲し総攻撃を開始する計画がすでにあった

さらに士気を低下させるため、日本軍はB - 29でカルタゴの陸軍
基地を空爆した

迎撃に上がる飛行機もなければ魔法の射程距離外でもある
対空砲もほとんど効果なし、エルフ軍の戦力は消耗を重ねるばかりだ

そんな中、エルフ軍は海がだめなら制空権を手に入れ大型長距離輸
送機で輸送すればいいと

考えた、そしてその作戦が開始され戦闘機がくるようになった

6月9日、

空軍基地 -

「第一監視所より！敵戦闘機飛来！」

タタタタッ

「高風さんもいくの！？」

「お供します！」

徹也にとって初陣である、春奈は空中戦をしつつ逃げてきた為初陣ではない、

しかし撃墜数はどちらもまだ0である

ブオオオオオ…

二人は零式戦に乗った、元々艦上戦闘機だが総合的に性能が高いこの機種を二人は好んだ

春奈は逃げてきた時にのっていた戦闘機である為、これが一番使いやすい機体だった

両翼にはそれぞれ一つずつ空対空ミサイル「空飛ぶ蛇くん」が装着されている」

同じく両翼には125発の20ミリ機銃の弾と燃料タンクがある胴体には12・7ミリ機銃がある、これは直前になって改造されたものである

7・7ミリでは力不足と軍は判断したのだ

ブオオオオ…

「隊長！左前方30度敵機！」

「よし！前方の雲に入り逆落としをかける！ゆくぞ！」

ブオオオオオ…

雲の中から突然、日本の戦闘機が出てきてエルフ軍はびっくりする

「なんかきたぞ！」

ダダダダ…

エルフ軍の戦闘機は木っ端を撒き散らした後、火を噴いた

一方徹也は春奈と編隊ほ組んで空中戦をしていた

「草加さん、勝負しましょ」

「勝負？」

「どっちが撃墜数多いか」

「いいぞ」

33 シチリア島の戦い 3（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

34 シチリア島の戦い 4

ブオオ…

激しい空中戦が展開された

「高風さん！後ろ！」

春奈の零戦の後ろにエルフ軍機が、そのエルフ軍機の後ろにつこうと春奈は
旋回を続ける

「上手ですね、敵軍も」

「一説では魔法の力で飛ばしてるらしいからな、まったくエルフは
進んでいるのだから遅れているのだからよくわからん」

エルフ軍の飛行機はお粗末なものだった、速度こそあっても運動性
能があまり
よろしくないのである

徹也は一機の後ろにつき20ミリの機銃をぶち込む

ドドド…

エルフ軍機はたちまち火を噴いて降下してゆく
さらにもう一機にも機銃を放った

今度は翼がとれてくるくる回りながらエルフ軍の戦闘機はおちてゆく

この空中戦が開始されてから日本空軍は次々と敵機を撃墜していった
しかも日本に損害はない

基地も近く、燃料も満タン、航続距離をそれほど気にしないで空中
戦ができる

「草加さん！あれを発射してみます！」

「よし！いっちょ命中精度を試したれ」

日本初の本格的空対空ミサイル、九式誘導噴進弾こと空飛ぶ蛇くん
をつかってみる事にした

「発射！」

空飛ぶ蛇くんは春奈の零戦から発射された

ゴオオオ...

魔力追尾機能のおかげで正確に敵機を追尾する
そしてミサイルは敵機に命中した

「やりましたよ草加さん！」

バラバラになったエルフ軍の戦闘機は火の玉となり落下する

「よし！」

徹夜もまたミサイルを放つ、
見事に命中した、一機に2発しか搭載できないのが欠点ではあるが

素人でも照準を合わせればほぼ確実に一機撃墜することができようになった

徹也は基地へ無線で報告した

「噴進弾ノ威力ハ絶大ナリ！」

「敵一機、之ヲ撃墜！」

春奈も二発目を撃つ、そしてまた撃墜

大きな戦果を挙げ顔では喜んだ
しかし内面では罪悪感を感じた

エルフとはいえこれほどあっさり命を奪っていいものなのだろうか？
そんな考えが春奈の頭を貫く

ブオオオ…

ダダダ…

「あつ！　まずい！」

ブオオ…

春奈は後ろについて発砲してきた戦闘機から逃げた

そして後ろにつき今度は機銃を放ち、なんとか撃墜に成功した

春奈は思った、これは戦争だ、やらなければこっちがやられる
戦場ではあたりまえの事を拒む必要はない

だがそれでも罪悪感を感じた

一方の徹也は4機を撃墜した

ダダダ：

「よし！ あと一機で撃墜王だ！」

彼の目標は大和帝国の撃墜王、大空のサムライこと坂本三郎海軍中尉、地球でいうと

坂井三郎に相当する人物だ

右目はほとんど見えないのにこれまでに64機を撃墜した
さらに僚機被撃墜記録がないのである

僚機被撃墜記録を出さないでかつ撃墜数64機を越える事だ
その為にも今回の戦闘で春奈を落させるわけにはいかない
必死で戦った

春奈は違った
単に助けてくれた人（徹也）に恩返しの為、彼にかわって活躍がし
たかった

今回の戦闘ではエルフ軍56機のうち38機を撃墜、日本軍の損害
は3機である

しかも皆、パラシュートで脱出する事に成功し生還した
制空権を守りぬくことに成功した日本軍はさらに大攻勢をかける

一方のエルフ軍はシチリア島攻略を諦めかけていた
戦力を整えてから今回の倍の戦力で再び上陸しようと計画をたてつ

つあった

エルフ軍の士気は高い、人間を野蛮な猿と見下し

今回の戦いも蛮行としてプロパガンダ利用しさらに士気は上がった人間をこの世からすべて消す勢いだった

一方の日本軍も士気が高い

一瞬シチリアを攻撃され島の中まで軍をすすめたエルフ軍を撃退しつつあり

「我が軍は強い、大戦で最も活躍した我が軍は最強」と思った

シチリア島で負けたといえは上陸時、浜から兵を撤退させたぐらいで後は連戦連勝だった

とくに空、兵士達の笑顔は絶えなかった

この時点でシチリア島の戦いの勝敗は目に見えていた

しかし現存のエルフ軍3万をこれからどう倒すかが課題である

3 4 シチリア島の戦い 4 (後書き)

皆様方のご感想お待ちしております

35 シチリア島の戦い 5

6月10日、鉄鋼要塞の兵力も消耗しつつあった
それでも近隣の部隊の協力で今なお難攻不落の大要塞と恐れられて
いた

エルフ軍はここさえ突破できればシチリア島は手に入ったも同然と
考えた

実際にここを突破されればロクな防衛組織がない

あっても数個の小隊や中隊があるくらいである

補給もなく長々戦っている場合ではない、現存兵力で総攻撃を仕掛
けようとした

午前9時、エルフ軍の大攻勢が始まった

ドン！

ドン！

日本軍は応戦するも圧倒的な数で苦戦した
しかしこれはチャンスだった

エルフ軍の戦力はほぼ一点に集中した
背後から、右から、左から、前方は要塞

平岸は包囲するよう命令した
包囲すればエルフ軍を倒したも同然である

「すすめ！敵軍を包囲しろ！」

機甲部隊を前に歩兵、砲兵隊が続く

日本軍の砲は車に牽引すれば簡単にもっていける

エルフ軍に近づいた所で砲兵の戦闘準備が開始された

戦車隊はすでに攻撃を開始した

この戦車隊は先鋭の乗員と最新式の軽戦車と中戦車で構成されている

ガアア…

「よし！敵の後方から撃て！」

「今だ！」

ドオン！

一斉射撃！

徹甲弾は後方の装甲を貫通した

T-34は燃え出した

T-34は恐ろしい戦車であるが後ろから一斉射撃すれば倒せない
事もない

日本の戦車のほうが質的に劣っていて、しかし75ミリ砲を装備した
新車はT-34を

奇襲攻撃により撃退する事に成功した

さらに一一式軽戦車も快速でしかもこれまでの軽戦車より頑丈で戦
車砲の威力も

上がっておりB Tを相手には有利に戦えた

最大の違いは乗員の質だ、エルフ軍は機械に慣れていない
ペトログリード事件のソ連軍同様であつた

人の質で、日本軍に劣る

しかもゲルマニア軍と違って日本軍は強大な軍隊であつた

午後1時、エルフ軍を包囲した日本軍は陸・空から総攻撃を開始した

要塞を後ろから攻撃しようといまく抜け出したエルフの小隊も
森をつまく利用した戦法をとる日本兵に倒されるのであつた

「浜を突破したときのように！ 背後から攻撃すれば陣地は崩れる
！」

「突撃！」

タタタタッ

ダダダダ…

「ああああ！！！」

炎の魔法を利用して日本兵が潜む森、洞窟を攻撃した

ゴオオ！！

最初は戦果があつたものの次第に別の所にいた部隊が駆けつけ

エルフ軍を圧倒していった

しかもエルフ軍の攻撃は戦局になんら影響を与える事はできなかった

物資は輸送すればいいと考えていたエルフ軍は人数のわりにもって
きた

武器・弾薬は少なかった

11日、物資が枯渇、弾に頼らず魔法で応戦するようになった
この魔法攻撃は予想外に効果があった

魔法なんてこれまでさほど脅威ではなかったのだが
エルフの魔法は格が違った

その威力は十分近代兵器に有効なものだった

ガアアア…

ドゴオオ!!

「おい！火がついたぞ！」

「穴が！穴が！」

「おい！三沢！しっかりしろ！」

戦車すらも撃破するほどの威力を備えていた
しかし兵士達は疲れる、内地からはさらなる援軍が

12日、エルフ軍はシチリア島攻略を諦めた
誇り高いエルフは自決していった

投降しようとした者は魔法で殺された

この日の夕方、エルフ兵捕虜は8000名までのほった
日本は悩んだ、これほど多くの捕虜をどうすればいいんだと
しかし本土を守る最後の砦、シチリア島を守りぬいた

35 シチリア島の戦い 5（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております

36 遊撃戦闘機「桜花」

「大本営！陸海空軍部発表！ 本日未明！我が軍にエルフは降参！
シチリア島防衛に成功セリ！」

敵は幾万ありとても

シチリア島の戦いが終わり、日本軍が勝利したというニュースは全
国で流された
もちろんシチリアのラジオでも流された

「調子いいですね、マスコミも」

「そりゃあ、戦いに勝ったんだからな」

「戦争自体はまだ終わってないけどな」

「早く終わるといいですね」

徹也らは調子のいいラジオを聞き少し安心した
我が軍は島の戦いに勝ったのだと

しかし戦争自体はまだ終結していない、今度はこちらから攻勢をし
かける
必要があつた

軍は悩んだ、エチオピア大陸か、聖地や砂漠があるハルケギニア大
陸中部か

どちらを制するにしても今の日本の国力では不可能に近い

大本営 -

「どちらにしても、我が国の国力では陥落させるのは難しいのであります」

「ん、しかし地理的に考えればエチオピアのほうが攻めやすい」

エルフと日本は海を挟むが隣国である

地理的に考えればエチオピアのほうが攻めやすいのである

しかしエチオピア大陸は砂漠が多い、日本軍は砂漠での戦いになれていない…というより
経験がない

14日、徹也らは一時厚木空軍基地へ帰還した

ブオオオ…

ギャッ

「おかえりー！！！！」

「よく戦った！！」

「お疲れさん！！」

歓迎の声が聞こえる

シチリアで戦った空軍のパイロットを皆は歓迎した

久々に自分の部屋へ戻ろうとした時、とある不思議な飛行機を見か

けた

航空参謀に聞いてみた

「なんですか、これは？」

プロペラがない、機首には30ミリの機関砲
後ろを見るとなにかを噴射するような穴が

「草加少尉、気になるか？」

「はい」

「こいつはな、桜花っていつて、俺のいた世界では特攻機だったんだが

この世界では邀撃戦闘機という役割をもっている」

「邀撃…？」

「3年前、西部戦線でゲルマニア軍の爆撃機を迎撃するのに開発が開始されたはいいのだが

試作機が完成したのは去年で一応16機を配備した」

「何故、目標がもうないのなら、この航空機は価値がないのでは？」

「そうでもない、なんでもエルフ軍は長距離大型戦略爆撃機を持っていると

噂されている、万が一攻めてきたら迎撃に使える」

「本来の使用目的が爆撃機の迎撃だからな」

本当かどうかはわかっていないがエルフ軍は長距離大型戦略爆撃機

を持っているらしい

まあどうせこの世界でいう場違いな工芸品であろうが

桜花のスペック -

見た目、ほぼ桜花、翼が桜花よりも後ろにあり車輪がついている
もちろん引き込み脚

翼と胴体には日の丸が描かれている

最高速度840キロ

発動機、ネ20（ただし実物のネ20とは別物）

航続距離、683キロ

高度、1万2千まで上昇可能

武装：

30ミリ機関砲×3

空飛ぶ蛇くん（九式誘導噴進弾）2発

性能的に第二次世界大戦期にドイツ軍が開発したジェット機レベルである

武装も高い命中精度を誇る空対空ミサイルを装備している以外ほぼ第二次世界大戦レベルの

ものであった、運動性能もプロペラ機に比べて劣る

また航続距離も短い

開発は最大手航空機メーカーのデイトリヒ工場である

「乗ってみるか？」

「はい」

徹也はコクピットへ乗り込む

計器類ほ見ると今までの戦闘機とほぼ変わらなかった

操縦桿もあまりかわらない、心で握る操縦桿だ

「特別な訓練をしなくても操縦できるように設計されているんだ
どうだ？ いざというときはこれで出撃してくれ」

「たとえばどんなときですか？」

「そうだな、我が軍でいうB - 29みたいなのが爆撃しにきたとき
な」

「そんなの、持つてる国ありませんよ」

その時、サイレンが鳴った

なんでも出撃しろとのサイレンだ

タタタッ！

「エルフ軍の紋章が入ったB - 29みたいな飛行機が帝都に近づいて
いるらしいぞ！」

「なに！？」

空軍本部 -

レオナルド・ルッキーニ元帥

「なに！？ 爆弾が宮城に命中したら陸軍の強硬派が暴走する！直ちに迎撃されたい！」

厚木 -

「草加さん！」

「高風さん！？」

春奈は飛行服をきてやってきた

「本当に…戦争なんですな…」

「らしい」

「B - 29らしき爆撃機20機が帝都へ向かって飛行中、迎撃されたい！」

「出撃用意！」

「敵は高高度を飛行している！今こそ桜花の出番だ！」

空軍は高高度を飛行する爆撃機を新型のジェット邀撃戦闘機「桜花」で

迎撃しようとした

全16機に操縦士が乗り込む

徹也はそのうち1人、この桜花にのつたのは腕のいいパイロットのみである

春奈は残念ながら乗る事はできず

キィィィ…ゴ…ゴオオオオオオ…！！

ジェットエンジン独特の音が基地内に響く

「がんばってください草加さん！」

「必ずや帰還する」

そういつて草加少尉率いる桜花戦闘機隊は出撃する
すごい轟音である

36 遊撃戦闘機「桜花」(後書き)

ご意見感想などありましたらお気軽にどうぞ

37 ホーイングスキー

「高度！ 7000…8000…9000…10000…11000…12000！」

ゴオオオオオ…

「隊長！ 左下11時の方向に敵爆撃隊発見！」

「よし！ 奇襲をかける！ みんな爆撃機は重武装だ

この飛行機あまり丈夫そうじゃないから弾があたったらおしまいだぞ」

「しかし逃げるのは許されない、意地でも全部落してやるという気持ちで戦え」

「しかし死に急ぎはするな、できるかぎり生きて帰れよ」

ゴオオオオ…

爆撃機 -

「ん？ 機長！ 後方より敵の戦闘機が！」

「馬鹿をいえ！ 聖地にあったこの高度1万を飛べる飛行機よりも高く飛べる

日本の戦闘機が存在するわけないだろ」

「しかし…」

何度もこのパターンでやられる爆撃機が存在した

今回もそんなパターンだろう

ドドドド...

「機長！ 右エンジン出火！」

「なに！？」

ドドド...

「撃て！この爆撃機は要塞だ！撃て！」

旋回機銃を撃ちまくったが桜花は速い、弾は命中しない

「なんて速い奴だ！」

ドドド...

「ぎゃああー！」

次々とB-29のような飛行機は落されてゆく
そして最後の一機も徹也が撃墜した

「よし！全機撃墜！損害は！？」

「ありません！」

「よし、これより帰投する」

ゴオオ...

桜花は大きな戦果をあげた、帝都空襲を阻止したのである

厚木付近の平地 -

「ん？ なんだべあれ？」

ゴオオ！

空軍基地 -

「閣下、敵機が近くに不時着したみたいです」

すぐに軍は回収にいった

技術者たちも集まった

そこで見たものはまちがいなくB - 29だ

… と思つたら細かい所は違つた
戦後の技術者藤田にはわかつた

これはソ連が開発したB - 29のコピー「tu - 4」という爆撃機だ
藤田はテレビの会見でこの飛行機をボーイングスキーと呼び
ボーイングスキーという呼び名は国内で人気になった

37 ポーイングスキー（後書き）

ご意見ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

38 バトル・オブ・ガリア 1

その頃エルフは

テュリユーク統領

「なにい？ 人間に負けただと？」

「はい…」

「蛮族の雑魚があそこまで強くなっているとは思いませんでした」

「まさか、こちらは5万の兵力だったというのに」

「まあいい、そもそも大日本帝国は海軍が命の国だろう
ならば陸から攻めればよい」

「…といたしますと？」

「まずはガリアを倒すんだ、ガリアを占領すれば日本は半島だから
孤立する」

次第に物資も枯渇し戦闘を行えなくなるだろう」

「なるほど」

エルフの目標は一気にシチリアからガリアへと変わった
ガリアを倒してから日本を征服する考えだ
たしかに半島を孤立させてしまえば長くは戦えない

「いつから戦える？」

「やろうと思えば明日からでも」

「ようし…やれ」

明日にもガリアと戦争ができる状態であった

日本軍はエルフに勝った、しかしガリア軍はどうだろうか？

日本の東郷首相は日記にこう残した

「ガリア軍ははつきりいつて弱小である、数が多いが士気は低く兵器の質も低い、訓練も行き届いてない、エルフやソ連とは国境が隣であるが

まともに戦えるとは思えない」

東郷はガリア軍は弱小と指摘している

人口約1500万のうち兵士は300万ほど、たしかに数は多いしかし先の大戦では軍事力こそゲルマニアに勝っていたものの国の大半を占領されるという有様であった、結局は日本軍のおかげで奪還することができたのだが

さらに装備も貧弱だ、陸軍はまだ槍やマスケット銃を装備している部隊が多く

機械化している部隊はあまりない

第一戦車軍という機甲部隊があるが戦車はほとんど九五式、しかもガリア兵は戦車を好まないのである

海軍は木造船が多く残り近代艦艇はほとんど買ったものである

空軍は早くから航空機開発に熱心であった

零戦を多く保有し一号戦闘機を3年間で780機生産、ゲルマニアから手に入れ技術で
ゾルタンに似た爆撃機を200機以上保有し規模は日本空軍より上
であった

しかし搭乗員の練度が低いのは否定できない

しかもガリア軍の兵力は分散しすぎている

翌日 -

ドン！

ついに戦いの火蓋がきられた

エルフ軍がガリアに侵攻、ガリア軍は応戦するも敗退を続けた

アルザス地域圏では激闘が繰り広げられた -

ダダダ…

ドオ！

「なんとしてでも！ 国を守れ！」

指揮官はやる気満々なのだが兵士達の士気は低かった

「どうせ負けるのに…はぁ…」

「どうでもいいけど、トリュフの灰焼きでも食いたいな」

兵士達のやる気はほとんど0

その頃シャンタルは日本へ助けを求めた

到着は20日の予定、それまでガリアは持ちこたえられるか

エルフ軍の魔法に押されどんどん後退してゆく
アルザスも三分の一がエルフの手に陥ちた

エルフ軍はさらに士気があがった

「ガリア軍は弱い！」というビラもまいた

唯一、規模が大きい空軍も練度の差で大敗する
ガリアは一時期の活気を失っていた
高い軍事力も夢のまた夢のものとなっていた

20日、徹也などの先鋭パイロットや日本陸軍10万がアルザスへ
やってきた

この頃になるとほとんど占領されていた

このような危機的状況なのだが日本兵はガリア兵を見て
こりゃあ負けるわと思った

なんと前線だというのに豪華なフランス料理を食べていた

「日本の皆さんも食べますか？」

「い……いや、我々は現存の食糧で十分であります」

日本兵は断つた、そんな豪華料理逆に恐ろしくて食べられない
というかほとんどの者はそんなもの食ってる場合あったら戦争しろ
と思った

38 バトル・オブ・ガリア 1（後書き）

ご意見ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

39 バトル・オブ・ガリア 2

日本軍 -

「ガリア軍はやる気あるのか？」

「皆だらつとしてるし」

「しかし同盟国である以上、助けないわけにはいきません」

日本兵は現地のガリア兵を見てあきれた

これじゃあ負けると思った

翌日より日本軍の作戦が始まった

日本の作戦は電撃戦だ

電撃戦とは第二次世界大戦にドイツ軍が行った戦法である

戦車・飛行機・機械化歩兵が高速で移動、敵に反撃の隙を与えぬまま進撃し占領する

戦法である

指揮官である、かつて戦車連隊長であった辻吉宗中将が戦いを早く終わらせるために、ドイツ軍が行った戦法で快進撃を行おうとしたのだ

司令部 -

「ただし…電撃戦には問題がある」

「ひとつは電撃戦は、ガリア軍と共同で行わなければならないがそのガリア軍は諸君らが知るように規模のわりに弱小である」

「従って、実質は我が軍だけで行う事になるだろう」

「エルフ軍は強い、普通の攻め方では半年経つても押し戻す事はできない」

まず、空軍の第一次攻撃隊が向かった

ヒュー…

ドゴオオ!!

すさまじい爆撃を繰り返す行い

さらにそこへ戦車隊が突撃

さらに機械化歩兵が突撃、エルフ軍は手持ちの武器、そして強力な魔法で応戦する

今までのハルケギニアならエルフ軍は敵を簡単に倒せただろう

しかし日本軍が相手では進撃はできない、それどころか後退する一方だった

夜 -

「…ん？」

「て…敵だああ!!」

日本軍が得意である夜襲も作戦の一つである
戦いに休みはないとの精神である

ドオン!

ドオン!

さらに、日本軍は夜間戦闘機「月光」を投入
制空権の確保を行った

「なんとしてでも敵の進撃を止める！」

エルフ軍も必死である、先鋭魔法部隊を前線に送った
これにより戦車4台が撃破された、しかし魔法部隊の50人は全滅
した

「突撃イ！」

「よし！突撃するぞ！」

「ついてこい！」

タタタッ

ダダダダ…

日本軍の攻撃はすさまじいものであった
夜だというのに新聞が読めそうなくらい明るくなった

こうして朝までにガリア軍が難攻不落の要塞と恐れていたここを、
僅か1日で突破
することに成功した

しかしマルヌライン運河で日本軍は進撃を止めざるをえなかった
なんと橋がエルフ軍に破壊されていたのである

ガリア軍も驚いた

「こう派手にやられたのでは仕方ない、工兵隊が到着するまで待つしかないな」

日本の将兵がつぶやく

22日、夜10時 -

「独立工兵連隊、ただいま到着しました！」

「うむ、ご苦労、今夜はゆっくり休んでくれたまえ」

「しかし、この作戦に休みはないはずで、今すぐ作業にとりかかりたいと思います！」

「うん、そうか、では頼むぞ」

トン！

トン！

トン！

「えっさ！」

「おい！その丸太をこっちにもってこい！」

「この木は使えそうだ」

「よし、斧をもってこい」

「わかりました！」

独立工兵連隊の涙ぐましい活躍により、作業は2日で終わった

「ありがとうー！！！」

日本・ガリア軍は再び進撃を開始した

ガリア軍は足をひっぱりながらもがんばって戦った

特にここより3キロ先にある敵との戦いでは日本軍よりも活躍し勝利をおさめた

6月末に入るとガリア軍は士気をあげてきた

日本軍の登場により勝利は確実と確信したのである

ガリア軍の士気が高くなったこと、日本軍の作戦がほぼ完璧に遂行されてる事で

6月30日には国境まで押し戻す事に成功した

日本・ガリア連合軍はさらにエルフ国内へ進撃した

39 バトル・オブ・ガリア 2（後書き）

ご意見ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

40 エルフのクーデター

連合軍がフライブルクへ進撃を開始しようとしたところ
エルフの頭領と首相東郷が会談を行った

「今行っている戦争は無意味です、今領土はちょうど開戦前の状態になりました

ここでどうでしょう？ この無意味な戦争をやめにしませんか？」

東郷も、そして日本人皆も、エルフが仕掛けてきた戦争が嫌であった
しかしテュリユークは東郷の交渉をあつさり断った

「蛮族である人間は全員滅びなければならない
したがこの戦争は正義の戦争であり、これをやめようというものは

神に逆らうものである」

「しかし、私はあなた方の事も心配して、無駄にエルフを殺したくない
でしょ？」

私も、無駄に日本人を殺したくないのであります」

「それが蛮族の見解か？ 私は正義の為ならいかなる犠牲をはらっても

それを達成しなければならぬと思っている」

「お前らもそうだろう、人間の正義とやらを達成する為なら、
我々を根絶やしにするはずだ」

強行な態度をとるテュリユークに東郷は悩んだ
物資もない、戦力も足りない、国民の反感もかいたくない、戦争の

早期終結を

目標として戦ってきた、1年以内に終わらせなければ日本の敗戦は高確率になる

早く終わらせねばと必死で交渉を行うもテュリユークは拒否した

「…貴方達こそ蛮族ではありませんか？」

「なに？」

「何が正義ですか？ぶっ殺しておいてそれはないのでは？」

「種として存在するものを食べる為でもないのに虐殺するのはどうかと思うのですね」

「貴様！」

ダン！

テュリユークが銃を発砲した、東郷を射殺してしまった

東郷は病院へ運ばれたが間もなく死亡が確定された

しかしテュリユークの非人道的行為は相手が人間とはいえ元々平和主義者である

エルフの反感をかった

しかしエルフは粛清されてゆく

一方日本では新たに石原が首相となった

戦時中である為、軍人を首相にしておけばいいと考えた

石原は考えた

国会 -

「最近エルフでも今の政権に反対する者がいましてその人たちは
粛清によつて消されたりしております」

「私はその人たちを利用できないかと考えました」

「……といいますと？」

「彼らにクーデターを起こさせ国をひっくりがえらせ講和へと
導こうと思うのです」

「なるほど、たしかに以前の大戦ではゲルマニアかそうでした
しかし今度はうまくいくのですか？」

「戦争の早期終結の為なら、なんだってやります」

「私の予想では遅くても来年、クーデターがあるでしょう……」
「武器を提供しましょう」

石原の論には反対する者も多かったが案の定、7月5日、地中海側
を拠点としてエルフ達は
クーデターを起こした

40 エルフのクーデター（後書き）

ご意見ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

41 内戦

エルフは二つに分裂した

一つはテュリユーク派、もう一つは人間側と講和し戦争を終結しようという平和派である

国連でも臨時で会談が行われた

「平和派を支援し、戦争の早期終結を目指しましょう」

国連は平和派の支援を決定した

翌日より支援は開始された

親善大使としてバツソ・カステルモール、ガリア東薔薇騎士団の花壇騎士が送られた

彼はガリアの中でも異色の軍人であった

先の大戦では質の低いガリア軍を指揮、日本軍が来るまで

持ちこたえさせ、この前の戦いでもガリア軍を指揮、日本軍が来てからは

思いもよらぬ快進撃を見せた

ガリア軍人の中でも名将として日本からも頼りにされている人物である

また現在皇后であるタバサに忠誠を誓っている為ガリアで最も親日的な人物でもある

「貴方が、反政府、我々の言い方では平和派のアーデイスさんですね」

「ええ」

アーデイス、元エルフ軍少将、戦争はあまり好まないがいざという時はやってやると

いうエルフの特性はもちろんもっているが人間をあまり悪く思っていない

また人間との戦争の原因を作ったテュリユークをエルフ史上最悪の統領と敵視している

二人の話はすすんだ

「やりましょう、我々も好きで戦っているではありません」

「ええ、テュリユークを倒しましょう」

3時間にも及んだ話し合いの結果、人間とエルフの意見は一致し共にテュリユークを倒そうと決めた

日本は三八式歩兵銃や一〇〇式機関短銃などの歩兵用装備から余った旧型の戦車、火砲、航空機などの兵器を平和派ヘルフに提供した

そして訓練を行った、エルフは天才である、飲み込みが早い一週間で実戦に送れるレベルまで成長した

7月15日、日本軍とガリア軍、平和軍によるテュリユーク派との戦いが開始された

「テュリユーク作戦」と名づけられたこの作戦はその名の通りテュリユークを

倒すというものである

厚木空軍基地 -

ブロー...

零式艦上戦闘機二一型と日本色に塗られたB - 29、そしてB - 29の維持費が高いことから資料を元に製造したB - 17、100機ほどが離陸準備を開始していた

今回徹也は戦闘機ではなくこのB - 17に乗る事になった

機長：草加徹也

副操縦士：高風春奈

上部旋回銃手兼航空機関士：長田

航法士：志村

通信士：高橋

爆撃手：野村

右側面銃手：広瀬

左側面銃手：山本

尾部銃手：田中

下部旋回銃手：磯部

「草加さん...」

「メンフィス・ベルって映画知ってます？」

「なんだそれ？」

「知ってるわけじゃないですよ、お父さんこの…B - 17でしたっけ？」

「この飛行機のファンなんです」

「それで好き好んでよく見てました」

「それで？どんな映画？」

「B - 17の話です、B - 17の乗組員は25回出撃したら帰国できることになってたらしいです」

「その中のメンフィス・ベル号の話で、このB - 17の乗員はみんな帰れたんですけど」

「相当ひどい目にあってました…」

「まさか…」

「不安なんです、B - 17に乗るのが」

「…大丈夫だ、強度テストの結果B - 17は丈夫だ、そう簡単には撃墜されないよ」

「…ですよ、不安ばかりかかえてたらダメですよ」

B - 17ファンなら誰でも知っているであろう映画「メンフィス・ベル」

物語の大半は空中だがその空中はとても壮絶である

タッタッタツ…

あるいてきたのは岡本大尉、爆撃隊長でB - 29で延べ20回近く出撃し生還している

「爆撃隊の諸君、爆撃は、簡単なようで大変、難しい」

「特に今回低空で爆撃を行わなければならないので、敵戦闘機の迎撃に

まちがいなく遭うだろう」

「気を抜いてはならない、特に今回爆撃機は初めてである草加機は特に、慎重に任務を遂行してもらいたい」

「はい！」

一同が返事をしたあと、待機した
出撃命令が出次第、出撃である

7時30分、

「出撃！」

タタタッ

全員、自機に乗り込む

カチッ

「うわあ…訓練は受けたけど久々に見るとすごいなこの飛行機」

「全機！離陸開始！」

ブオオオオ...

戦闘機と爆撃機が離陸してゆく

4 1 内戦（後書き）

ご意見ご感想などありましたらお気軽にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3617h/>

あゝ皇国の零～東西冷戦、そして世界大戦...？

2010年10月8日12時03分発行